

望月町文化財調査報告書 第21集

下吹上遺跡

— 第二次緊急発掘調査報告書 —

1992. 3

望月町教育委員会

序

ここに、平成2年度に国庫補助対象事業で実施した発掘調査の実績報告書として、平成3年度事業「下吹上遺跡第二次緊急発掘調査報告書」が刊行される運びとなりました。

第一次発掘調査は、昭和51年11月に学術調査を目的に実施し、縄文時代の各期の住居址を6棟と、そのうち1棟は敷石住居址を検出するなど多くの成果が上げられており、昭和53年11月に報告書が刊行されています。また、同年には敷石住居址をはじめ貴重な縄文時代の集落址が確認されたということから、2棟に屋根を葺いて復元することによって当時の姿を再現し、学校教育や社会教育に役立てようと調査地域が保存されました。

本第二次発掘調査は、個人住宅建設に伴う緊急発掘調査でありましたが、本書に記載したように、下吹上遺跡全体の概要を知る上で重要な成果を得ることができました。

望月町における発掘調査は、昭和36年に開墾ではば破壊された協和大谷地の山ノ神第1号古墳を、発掘調査という名目で処理を行なった例がありましたが、本格的に実施をしたのは、下吹上遺跡が初元ということになります。この調査以降、下吹上遺跡第二次発掘調査を含め31件の発掘調査が実施され、その他にも遺跡詳細分布調査1件、試掘調査2件が行なわれるなど積極的な埋蔵文化財保護行政が行なわれてきました。

近年、急激な開発の波の中で失われていく文化財は増大する一方ですが、歴史を築き上げてきた先人の足跡を守り、永く後世に伝えていくことは、私たちにとっても、また、現代社会にとっても極めて重要な使命であると思います。動きの激しい社会の中にあっては、最小限度記録として保存し、そして活用することによって現代社会に役立てていかなくてはならないと痛感している次第です。

発掘調査に際しましては、顧問の森嶋 稔先生をはじめとして調査員・作業員の皆様には熱意あふれるご指導・ご協力を賜りました。特に調査実施の申し出をしてくださった依頼主であり地主の松本正己さんには、発掘調査のご理解とご協力を賜り感謝の念に耐えません。それぞれの関係された方々に対しまして、衷心より敬意と感謝の意を表する次第です。

本調査の成果が、記録保存の役目を担って多くの方々に利用され、郷土を再認識し、益々の歴史研究発展の足掛りともなれば幸いと存じ願うものであります。

平成4年3月19日

望月町教育委員会
教育長 田中 稔

例 言

調査及び報告書作成業務

1. 本書は、平成2年5月15日～6月1日に発掘調査を実施した下吹上遺跡第二次緊急発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、個人住宅の建設に先立って望月町が直営で実施し、教育委員会と教育委員会が組織した発掘調査団がその任に当たった。
3. 遺構の実測は、金井重恭・白田俊保・掛川喜四郎・福島邦男が行ない、福島茂子・小野澤ちえ子とその補助を行なった。
4. 遺構の写真撮影は、福島邦男が行なった。
5. 遺物の洗浄は、作業員が、注記は福島茂子が行なった。
6. 土器の復元は、倉見 波・金井重恭・吉澤浩矣が行なった。
7. 拓本は、掛川喜四郎・福島茂子が行なった。
8. 遺物の実測は、写真実測方式をとり、その撮影を委託契約により小川忠博が行なった。撮影した写真のトレース用構成を福島茂子が、トレースを福島邦男、寺内隆夫、福島茂子が行なった。
9. 遺構図の調整及びトレースは、福島邦男が行なった。
10. 遺物の写真撮影は、福島邦男が行ない、その補助を福島茂子が行なった。
11. 図及び図版の作成は、福島邦男・福島茂子が行なった。
12. 本書の執筆は、序文……田中 稔・目次関係……福島茂子・本文……福島邦男が行なった。
13. 発掘調査に係る書類・写真・遺物等全ての資料は、望月町教育委員会が保管している。

本書の内容

1. 本書には、検出した遺構全てを掲載したが、遺物については、遺構出土資料を優先させ、遺構外資料は代表的なもののみを掲載した。
2. 位置図及び分布図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1と、望月町発行の5,000分の1を使用した。

本文目次

序		
例言		
目次		
第I章 発掘調査の経過	1	
第1節 発掘調査に至る経過	1	
第2節 発掘調査の構成	4	
第3節 調査団組織	4	
第4節 調査の経過(調査日誌)	5	
第II章 遺跡の立地と環境	6	
第1節 遺跡の立地と自然的環境	6	
第2節 遺跡の歴史的環境	9	
第III章 遺構と遺物	10	
第1節 縄文時代の遺構と遺物	10	
1. 第6号住居址(10)	2. 第7号住居址(14)	3. 第8号住居址(18)
4. 第9号住居址(20)	5. 第10号住居址(24)	6. 第11号住居址(25)
7. 第12号住居址(26)	8. 第13号住居址(29)	9. 第1号土壇(31)
10. 第2号土壇(33)	11. 第3号土壇(33)	12. 第4号土壇(34)
13. 第5号土壇(34)	14. 第6号土壇(35)	15. 第7号土壇(36)
16. 第8号土壇(37)	17. 第9号土壇(37)	18. 第10号土壇(37)
19. 第11号土壇(38)	20. 第12号土壇(38)	21. 第13号土壇(38)
22. 第14号土壇(38)	23. 第15号土壇(38)	
第2節 遺構外出土遺物	39	
1. 縄文時代の土器	39	
2. 縄文時代の石器	41	
第IV章 総括	51	
図版		

挿図目次

第1図	下吹上遺跡位置図 (1:50,000)	7
第2図	下吹上遺跡周辺の遺跡分布図 (1:10,000)	7
第3図	第6号住居址実測図 (1:60)	10
第4図	下吹上遺跡(第二次調査)遺跡全体図 (1:100)	11・12
第5図	第6号住居址出土土器実測図 (1:3)	13
第6図	第7号住居址実測図 (1:60)	14
第7図	第7号住居址出土土器実測図 (1:3)	15
第8図	第7号住居址出土土器実測図 (1:3)	16
第9図	第7号住居址出土土器実測図 (63~71 1:2、72~80 1:3)	17
第10図	第8号住居址実測図 (1:60)	19
第11図	第8号住居址出土土器実測図 (1:3)	20
第12図	第8号住居址出土土器実測図 (16~22 1:2、23~27 1:3)	21
第13図	第9号住居址実測図 (1:60)	22
第14図	第9号住居址出土土器実測図 (1 1:6、他1:3)	22
第15図	第9号住居址出土土器実測図 (3 1:2、5~11 1:3)	23
第16図	第10・11号住居址実測図 (1:60)	24
第17図	第10号住居址出土土器実測図 (1:3)	25
第18図	第10号住居址出土土器実測図 (1:3)	25
第19図	第11号住居址出土土器実測図 (1:3)	26
第20図	第11号住居址出土土器実測図 (7 1:2、8 1:3)	26
第21図	第12号住居址実測図 (1:60)	27
第22図	第12号住居址出土土器実測図 (1・2 1:6、他1:3)	28
第23図	第12号住居址出土土器実測図 (8~10 1:2、11 1:3)	29
第24図	第13号住居址実測図 (1:60)	30
第25図	第13号住居址出土土器実測図 (1:3)	30
第26図	第13号住居址出土土器実測図 (11~17 1:2、18・19 1:3)	31
第27図	第1号土壇実測図 (1:40)	32
第28図	第1号土壇出土土器実測図 (1:6)	32
第29図	第2号土壇実測図 (1:40)	32
第30図	第2号土壇出土土器実測図 (1:3)	32
第31図	第3~5、14・15号土壇実測図 (1:40)	33

第32図	第3号土壙出土土器実測図 (1:3)	33
第33図	第3号土壙出土石器実測図 (1:3)	34
第34図	第4号土壙出土土器実測図 (1:3)	34
第35図	第4号土壙出土石器実測図 (1:3)	34
第36図	第5号土壙出土土器実測図 (1:3)	34
第37図	第5号土壙出土石器実測図 (1:2)	34
第38図	第6~9号土壙実測図 (1:40)	35
第39図	第7号土壙出土土器実測図 (1:6)	35
第40図	第10~13号土壙実測図 (1:60)	36
第41図	第10号土壙出土土器実測図 (1:3)	37
第42図	遺構外出土土器実測図 (1:3)	42
第43図	遺構外出土土器実測図 (1:3)	43
第44図	遺構外出土土器実測図 (1:3)	44
第45図	遺構外出土土器実測図 (1:3)	45
第46図	遺構外出土土器実測図 (1:3)	46
第47図	遺構外出土石器実測図 (1~15 1:2、16~20 1:3)	47
第48図	遺構外出土石器実測図 (1:3)	48
第49図	遺構外出土石器実測図 (1:3)	49
第50図	遺構外出土石器実測図 (1~12 1:3、13・14 1:6)	50
第51図	下吹上遺跡遺構全体図及び第5号住居址	52
第52図	第4号住居址及び第1号敷石住居址遺構及び遺物	53
第53図	下吹上第2号住居址埋藏	54
第54図	野島式土器	55

表 目 次

第1表	下吹上遺跡周辺の遺跡分布表	8
第2表	土器分類表	40

図版目次

- | | |
|-------|--------------------|
| 図版一 | 遺跡全景 |
| 図版二 | 遺跡全景 |
| 図版三 | 第六号住居址 |
| 図版四 | 第七号住居址 |
| 図版五 | 第七号住居址 |
| 図版六 | 第七号住居址 |
| 図版七 | 第八号住居址 |
| 図版八 | 第九号住居址 |
| 図版九 | 第九号住居址 |
| 図版十 | 第十一~十三号住居址 |
| 図版十一 | 第十一号住居址 |
| 図版十二 | 第十二号住居址 |
| 図版十三 | 第十二号住居址 |
| 図版十四 | 第十三号住居址・第一号土壙 |
| 図版十五 | 第三~五・十三~十五号土壙 |
| 図版十六 | 第三・四・六・十号土壙 |
| 図版十七 | 第六・十号土壙 |
| 図版十八 | 第十三号土壙・遺構外出土土器（早期） |
| 図版十九 | 遺構外出土土器 |
| 図版二十 | 遺構外出土土器 |
| 図版二十一 | 遺構外出土土器・石器 |
| 図版二十二 | 遺構外出土石器 |
| 図版二十三 | 遺構外出土石器・下吹上遺跡遠景 |
| 図版二十四 | 神事及び調査風景 |

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 発掘調査に至る経過

下吹上遺跡は、調査に関しての長年の経過がある。その初元は、昭和30年に当時耕作者であった飯島太郎氏が、耕作中に偶然にも鉄平石が幾枚も敷き並べられているのを発見し、関心の深かった人々によって敷石住居址であることを確認した。そして、調査はせず写真撮影を行なって埋戻しがなされていた。これらの状況写真は、「北佐久郡誌」第二巻歴史編に掲載されている。

昭和50年になって、敷石住居址を中心にした下吹上遺跡の集落址の発掘調査が町文化財調査委員会（現文化財保護審議会）より提案され、町の積極的な理解により昭和51年度に予算化され、学術発掘調査が実施された。この調査の結果、敷石住居址を含め6棟の住居址が検出され、また貴重な遺物が出土した。当町では初めての正式発掘調査であり、学術的にも極めて重要な成果が得られたことから、調査地域を保存するとともに、住居址を復元することによって学校教育や社会教育の用に供しようという提案がなされ、昭和53年度に復元住居址を2棟完成させ、この2棟を中心に保存地区を設定し、町有地として保存するに至っている。この事業と同時に、同年に「下吹上遺跡発掘調査報告書」が、町教育委員会と長野県考古学会研究報告書11集として刊行されている。

第二次発掘調査ともなる本発掘調査は、平成元年度に地主である松本正己氏より自らの住宅建設に伴い、事前に発掘調査の依頼があり、平成2年度に実施した。また、検出した遺構の成果品や、出土資料の整理は、平成2年度と3年度に分けて行ない、平成3年度に本報告書が刊行される運びとなった。

尚、調査地点の設定については、敷地内に住宅等設計図に基づく縄張りを行なわない限り、詳細な地点を建設の1年以上も前に設定することは不可能である。それに加えて物置の建設、駐車場の設置、水道管・ガス管・排水施設の設置、将来には温室や家の増築などが当然予想され、発掘の計画段階から遺跡の現状変更箇所を点で指摘することは不可能に近い。従って、最大限度で予想される範囲を設定することが、埋蔵文化財の保護につながるものと考えている。

下吹上遺跡第二次発掘調査は、平成元年度より手続きが開始された。予算は多額であり、発掘調査の原因者である地主が負担することができないので、100%補助対象経費とし、国庫補助額50%、県費補助額15%、町負担額35%により構成した。前述したが、平成2年度は発掘調査と一部整理、平成3年度が残りの整理と報告書刊行事業を実施した。その経過は、以下に示すとおりである。

平成元年度

8月21日「埋蔵文化財包蔵地における住宅等の建設と発掘調査の実施について」（地主からの依頼）

- 8月31日 「平成2年度文化財補助事業計画について」(回答) 元望教第928号
- 9月25日 「平成2年度文化財補助事業計画の事情聴取について」(通知) 元教文第126号
- 10月11日 「平成2年度文化財補助事業計画について」(提出) 元望教第1359号

平成2年度

- 5月1日 「平成2年度下吹上遺跡緊急発掘調査(第2次)の事業実施について」(伺)
- 5月7日 「平成2年度埋蔵文化財発掘調査の通知について」 2望教第419号
- 5月7日 「平成2年度埋蔵文化財発掘調査作業員の雇用について」(伺・決裁)
- 5月10日 「平成2年度下吹上遺跡緊急発掘調査結団式及び調査の実施について」(通知)
- 5月28日 「平成2年度文化財関係国庫補助事業計画の内定について」(通知) 2教文第113号
- 5月29日 「労働保険関係成立届」(提出)
- 5月31日 「労働保険概算保険料中告書」(提出)
- 6月2日 「平成2年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書について」(提出) 2望教第575号
- 6月2日 「平成2年度文化財保護事業補助金交付申請書について」(提出) 2望教第575号
- 6月13日 「平成3年度文化財補助金等事業計画について」(照会) 2教文第134号
- 6月20日 「平成3年度文化財補助金等事業計画について」(回答) 2望教第652号
- 9月19日 「平成3年度文化財補助事業計画の事情聴取について」(通知) 2教文第250号
- 10月1日 「平成3年度文化財補助事業計画について」(提出) 2望教第1120号
- 12月19日 「平成3年度文化財関係補助事業計画について」(照会) 2教文第266号
- 12月28日 「平成3年度文化財補助事業計画について」(提出) 2望教第1188号
- 3月19日 「労働保険確定保険料申告」(提出)
- 3月31日 「埋蔵文化財の取得について」(届) 3望教第251号
- 3月31日 「埋蔵文化財保管証」(提出) 3望教第251号
- 3月31日 「平成2年度国宝重要文化財等保存整備事業実績報告書について」(提出) 3望教第256号
- 3月31日 「平成2年度文化財保護事業実績報告書について」(提出) 3望教第257号
- 4月30日 「埋蔵物の文化財認定について」(通知) 2教文第4—36号

平成3年度

- 5月17日 「平成3年度埋蔵文化財発掘調査(整理及び報告書刊行)事業の実施について」(伺)
- 5月17日 「平成3年度埋蔵文化財発掘調査事業の調査員の委嘱について」(伺)
- 5月17日 「平成3年度埋蔵文化財発掘調査(整理及び報告書刊行)事業の作業員の雇用について」(伺)
- 5月29日 「平成3年度文化財関係国庫補助事業計画の内定について」(通知) 3教文第111号
- 6月1日 「文化財保護事業事前着手届の提出について」

- 6月1日 「平成3年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書について」(提出)3望教第556号
- 6月1日 「平成3年度文化財補助事業補助金交付申請書について」(提出)3望教第557号
- 6月3日 「文化財補助事業の適正な執行について」(通知)3教文第120号
- 6月5日 「平成3年度埋蔵文化財発掘調査(整理及び報告書刊行)における作業員の雇用について」(伺・決裁)
- 6月6日 「平成3年度埋蔵文化財発掘調査(整理・報告書)における出土遺物写真実測の実施について」(伺・決裁)
- 6月10日 「下吹上遺跡出土遺物写真実測の委託契約の締結について」(6月14日締結)
- 6月17日 「下吹上遺跡出土遺物写真の実施」
- 6月27日 「下吹上遺跡出土遺物写真実測一完了届一について」(提出)受3望教第777号
- 9月11日 「平成3年度文化財関係国庫補助事業の交付決定について」(通知)3教文第1号
- 9月17日 「平成3年度文化財補助事業県費補助金の内示について」(通知)3教文第2号
- 10月15日 「平成3年度文化財保護事業補助金交付決定について」(通知)3教文第2—15号
- 1月9日 「平成3年度文化財関係補助事業の不用見込額調について」(照会)3教文号外
- 1月13日 「平成3年度文化財関係補助事業の不用見込額調について」(回答)3望教第31号
- 1月14日 「平成3年度下吹上遺跡発掘調査の報告書印刷製本について」(伺・決裁)
- 1月22日 「平成3年度下吹上遺跡第二次緊急発掘調査報告書印刷製本の業者選定について」(伺・決裁)
- 1月24日 「平成3年度下吹上遺跡第二次緊急発掘調査報告書印刷製本の業者選定について」(伺・決裁)
- 1月30日 「平成3年度下吹上遺跡第二次緊急発掘調査報告書印刷製本の委託契約締結」
- 3月〇日 「平成3年度文化財関係補助事業の実績報告書提出について」(通知)
- 3月〇日 「労働保険確定保険料申告書」(提出)
- 3月〇日 「平成3年度国宝重要文化財等保存整備事業実績報告書について」(提出)
- 3月〇日 「平成3年度文化財保護事業実績報告書について」(提出)
- 4月〇日 「平成3年度国宝重要文化財等保存整備費補助金の額の確定について」(通知)
- 4月〇日 「平成3年度文化財保護事業補助金の額の確定について」(通知)

第2節 発掘調査の構成

1. 遺跡名 下吹上遺跡
2. 所在地 長野県北佐久郡望月町大字協和字下吹上2,923番地
3. 調査原因 個人住宅建設事業に伴い下吹上遺跡に影響が及ぶため、事前に発掘調査を実施し記録保存を図る。
4. 調査依頼者 長野県小諸市御影新田2,141番地 松本正己
5. 調査主体者 望月町 町長 佐藤幸男、望月町教育委員会
6. 調査期間 (平成2年度) 平成2年5月15日～平成2年6月1日
(平成3年度) 平成3年6月1日～平成4年3月19日
7. 調査面積 390.5㎡
8. 調査方法 トレンチ方式を基本とし、遺構確認の段階で掘り下げの範囲を拡大した。トレンチの範囲は2,923番地全体を対象にした。

第3節 調査団組織

1. 顧問 森嶋 稔 (長野県考古学会長・長野県埋蔵文化財保護指導委員・千曲川水系古
代文化研究所主幹・望月町誌編集委員長・日本考古学協会)
2. 調査団長 田中 稔 (望月町教育委員会教育長)
3. 調査担当者 福島邦男 (望月町教育委員会学芸員・日本考古学協会)
4. 調査員 渡辺重義 (軽井沢町文化財専門委員・長野県考古学会員)
倉見 渡 (長野県考古学会員)
掛川喜四郎 (望月町文化財保護審議会委員・長野県考古学会員)
吉澤浩典 (望月町誌調査員)
金井重恭 (望月町文化財保護審議会委員・長野県考古学会員)
白田俊保 (長野県考古学会員) —平成2年度
百瀬忠幸 (長野県考古学会員) —平成3年度
寺内隆夫 (長野県考古学会員) —平成3年度
5. 調査員補佐 (平成2年度) 福島茂子、小野澤ちえ子、上野知一、小野澤直次
(平成3年度) 福島茂子、上野知一、小野澤直次
6. 作業員 (平成2年度) 小池嘉一、市川吉治、上野清治、佐藤久衛
(平成3年度) 百瀬元門、関 勝兵
7. 協力者 上野 陽、上野道治、清水才司
8. 事務局 (平成2年度) 社会教育係、(平成3年度) 文化振興係

第4節 調査の経過（調査日誌）

平成2年度

- 5月15日 町長、教育長、教育次長、社会教育係長、担当学芸員、調査員、作業員の出席のもと、金井神官による神事及び繪図式が行なわれる。引き続き、測量に合せトレンチを設定し、掘り込みが行なわれる。縄文前・中期の土器片や石器が僅かに出土する。
- 5月16日 トレンチの掘り込みを行なう。調査区東端で住居の床とみられる固いタキ部分が見つかる。縄文前・中期土器、打石斧、黒曜石フレイクが出土する。
- 5月17日 調査区最西端より縄文中期末の半個体の土器が出土する。住居に伴うものとみられ、黒色土の落ち込みや灰が検出された。また、調査区最東端に住居の落ち込みが検出される。
- 5月18日 遺構の検出箇所トレンチ掘りを拡張する。本日までに、第6～9号住居までの4棟の住居を確認する。いずれも縄文時代中期末葉で、9住は埋裏と炉址で判断した。
- 5月21日 新たな遺構検出作業を進めるとともに検出された遺構の掘り込みと写真撮影のための清掃を行なう。
- 5月22日 第9号住居の写真撮影と平板測量及び埋裏の半載作業を行なう。第1号土壌のプラン確認と掘り込みを行なう。
- 5月23日 第7号住居の掘り込み、炉址、柱穴の掘り込み、第6～8号住居の写真撮影、第9号住居の2度目の写真撮影、第1号土壌の断面実測を行なう。
- 5月24日 第7号住居の清掃と写真撮影、第7・9号住居の実測、第1号土壌の掘り込みと清掃及び写真撮影、北西部土器出土地点の遺構検出作業を行なう。第10～12号住居をほぼ確認する。
- 5月25日 第6～8号住居の実測、第10～12号

住居の清掃及び写真撮影。第1号土壌の実測。

- 第2～4号土壌を検出し掘り込みを行なう。
- 5月28日 第1号土壌の実測と半個体土器の取り上げを行なう。第2～4号土壌は再度の掘り込みを行なう。第5～7号土壌を新たに検出し、掘り込みと清掃作業を行なう。第7号住居の清掃を行なう。教育委員の視察。
- 5月29日 第7号住居の清掃及び写真撮影、第10号住居の清掃及び写真撮影。第2～7号土壌の清掃及び写真撮影、さらに平板測量を実施する。新たに第13号住居を検出する。本日より遺構全体測量を開始する。また、全体測量が終了した部分より埋め戻しを開始する。
- 5月30日 第7・10号住居の測量、第13号住居の清掃及び写真撮影を行なう。遺構全体測量を続ける。また、埋め戻しも一部実施する。
- 5月31日 各遺構ごとの処理はすべて終了した。引き続き遺構全体測量と一部埋め戻しを行なう。
- 6月1日 遺構全体測量を実施し終了する。本日まで調査した内容や測量図面等の点検を行なう。埋め戻しを行なう。
- 6月2日 埋め戻しを行ない全ての調査を終了した。機材の撤出を行なう（事務局）。
- 平成3年度
- 6月1日～3月19日 平成3年度における事業は、前年度調査した成果物の整理と発掘調査報告書の刊行事業であり、調査担当者を中心に調査員と作業員により行なわれた。主な仕事は、遺物の写真実測（委託契約）、写真からのトレース、図面の作成、遺構図の修正とトレース、図組み、土器の拓本どり、土器の断面実測、図組み、また、図版用の土器と石器の写真撮影、並びに図版組みを行なう。その後、担当者により全体の調整がなされ、原稿執筆を行ない3月19日に本報告書が刊行される見込みとなった。

第II章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地と自然的環境

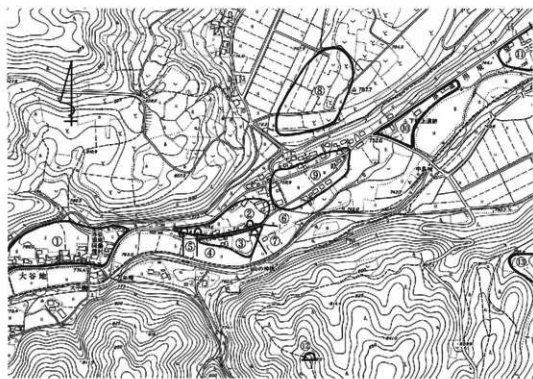
望月町は、北佐久郡のなかでも千曲川の西方に位置し、北は北御牧村、西は立科町、東は浅科村、南は一部佐久市と隣接している。西南方向には、山懐深い蓼科山(2,530m)を中心とする山系が連なり、北東方向には千曲川を隔てて聳え立つ浅間山(2,560m)の連山を臨むことができる。望月町の地質及び地形の形成は、大きく二つの要因に起因しているといえ、その一つは、蓼科山の火山活動により基盤並びに地形の形成がなされていることであり、もう一つは、御牧原台地や八重原台地が地殻の断層運動によって形成されていることである。望月町にかかる御牧原台地は、その南端において上部に「相浜層」(模式地:佐久市相浜)と呼ばれる非常にうろい湖沼性堆積層によって形成されており、各所に露頭箇所を見ることができる。堆積物は、凝灰岩、泥岩、砂岩及び礫質砂岩などで、幾層にも繰り返り互層しており、ほぼ水平層に近い。これらの地層の中では、泥岩から針葉樹や広葉樹などの珪藻類の化石が産出し、比較的容易に採取することができる。また、相浜層の下部は「瓜生坂層」(模式地:望月町大字望月)と呼ばれ、メタセコイヤやその他の植物化石が得られることから、相浜層が、新生代第四紀更新生の前期と推定されているのに対し、瓜生坂層は、新生代第三紀鮮新世の後期に属すると推定されており、今から約200万年以前に形成されたということがわかる。一見すれば、蓼科山の裾野のように連なっているが、この瓜生坂地籍から御牧原台地にかけては、形成過程にかなりの相異がみられるものである。

一方、蓼科火山によって形成された地籍は、立科町芦田付近、望月町の瓜生坂より北方と茂田井地籍を除く全地域、さらに浅科村の五郎兵衛新田付近にまで達しており、これらの地域をいわゆる蓼科火山地域と呼んでいる。中央に位置する蓼科火山群の南方には、八ヶ岳火山群が連なり、また、西方には霧ヶ峰火山群がその雄姿を止めている。蓼科山は、全般に緩傾斜の裾野が北方の望月町方面へ延び、しかも雄大である。大河原峠付近にあっては、極めて急傾斜の谷を形成しているが、多くは蓼科山を中心に放射状に延びる緩やかな谷を形成している。これらの地域は、安山岩の分布が広く見られ、中でも両碑石安山岩、しそ碑石安山岩、角閃石安山岩が主体を成している。これらは、望月町の浅田切、八丁地、畳石、菅原、大谷地、吹上など八丁地川の中・上流地域に見ることができ、しかも熱の珪化作用による板状節理がもの美事に発達し、天然記念物のごとく美しい露頭を見ることができる。

望月町を流れる主流は、鹿曲川、細小路川、八丁地川、布施川の4河川であり、いずれも蓼科山を源流とし、長い裾野を縫って流下している。細小路川は春日で、また八丁地川は望月で鹿曲川と合流し、北御牧村で千曲川に流れ込んでおり、布施川は、浅科村において千曲川と合流している。これら蓼科山と主流の4河川は、この地方においては人々の生活や動植物の生糧にとって必要不可欠な自然的条件であるとともに、これらの自然環境を取り入れながら過去から現在に至



第1図 下吹上遺跡位置図 (1 : 50,000)



第2図 下吹上遺跡周辺の遺跡分布図 (1 : 10,000)

第1表 下吹上遺跡周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種類	現状	遺構・遺物	備考
①	平石遺跡	大字協和字平石	集落址	畑・水田 宅地	(縄・早～後) 早期～後期の各期の遺物、(弥・中・後) 土器、滑石製模造品、須恵器、(京・平) 土師器、須恵器、(中～近) 小銭、陶磁器	昭和62年度に発掘調査 同63年度に報告書発行
②	山ノ神A遺跡	大字協和字山ノ神河原 上吹上	散布地	水田 宅地	(縄・早・前・中・後) 銅鉢、黒曜石フレイク、(古・後) 須恵器、(平) 土師器、須恵器	平成元年度に発掘調査
③	山ノ神B遺跡	大字協和字山ノ神河原	散布地	畑・宅地	(縄・中～後) 土器、フレイク、(弥・後) 土器、(平) 土師器、須恵器	平成元年度一部発掘
④	山ノ神第1号古墳	大字協和字山ノ神河原	古墳	畑	(古) 直刀14、刀子32、刀装具20、馬具4、鉄鍬53、勾玉7、管玉1、切子玉17、金環13、銀環1、金鈴2、埴輪片4	昭和45年度に発掘調査 報告
⑤	山ノ神第2号古墳	大字協和字山ノ神河原	古墳	畑	(古) 天井石は存在しない。石室露呈	保存良好
⑥	山ノ神第3号古墳	大字協和字山ノ神河原	古墳	宅地	(古) 横穴式石室、直刀3、刀子10、鉄鍬50以上、管1、管1、合葉1、辻金具2、雲珠1、帯金具2、瑪瑙製曲玉7、水晶製切子玉2、水晶製丸小玉2、琥珀製丸小玉1、滑石製白玉1、ガラス製小玉14、金環2	平成元年度に発掘調査 平成2年度に報告書発行
⑦	山ノ神第4号古墳	大字協和字山ノ神河原	古墳	畑	(古) 横穴式石室、刀子3、鉄鍬15、金環2、管3、帯金具1	平成元年度に発掘調査
⑧	貴船反遺跡	貴船反 大字協和字太田 南池	散布地	畑・水田	(縄・中) 中期後半の住居址、深鉢、打石弁・土器・フレイク、(平) 土師器、須恵器	
⑨	上吹上遺跡	大字協和字上吹上	集落址	水田	(縄・中～後) 中期住居址7、集石11、土塊、深鉢、埋篋伊、打石弁、打石弁、磨製斧、石鏃、凹石、礫石、石匙、フレイク他	昭和63年度に発掘調査 元年度に報告書
⑩	下吹上遺跡	大字協和字下吹上	集落址	水田	(縄前～中) 前期住居址1、中期住居址9(内敷石住1)、埋篋、銅鉢、洗鉢、打石弁、磨石弁、石鏃、ノミ型石器、凹石、礫石、石匙等	昭和51年度 平成元年度に発掘調査
⑪	下吹上遺跡	大字協和字下吹上	散布地	畑	(縄・中) 土器、(平) 土師器・須恵器	
⑫	内裏塚第2号古墳	大字協和字新林	古墳	山頂	(古) 5世紀代とみられる山頂の円墳	保存良好
⑬	堂上日影A遺跡	大字協和字堂日影	散布地	畑	(平) 土師器、須恵器	

るまで日々刻々と生活が営まれたのであり、基本的な生命泉であるといえる。

下吹上遺跡は、これら主流4河川のうちの八丁地川中流域の左岸河岸段丘に位置しており、河岸線の縁辺より遺跡の範囲となっている。八丁地川水系は、夢科火山で形成された新世代第四紀更新世の安山岩系の山塊が続いており、いわゆる鉄平石の岩肌が美事に発達している。しかし、この岩塊は、上吹上遺跡・下吹上遺跡の西方付近で区切られ、ここから下流に至っては、ローム層、火山岩屑の堆積層や沖積層へと変化しており、複雑な堆積状況を示している。

下吹上遺跡周辺地域は、山間に囲まれた安山岩系の山塊地を抜けて比較的段丘面が広く発達しはじめる地形をなし、八丁地川の川幅もしだいに広がっていく箇所にもあたっている。また、河床から遺跡の位置する段丘面は比高差もあり、長年の河床面の浸食を物語っている。

地質構造は、第一層：耕作土、第二層：茶褐色土、第三層：黄色ソフトローム、第四層：礫混り黄色砂質土層となっており、遺構は第三層のソフトローム層から掘り込んで、第四層の礫混り黄色砂質土層に達して構築されていた。本地域は、僅かな地点の違いによって形成層に変化がみられ、例えば第一次調査地点が、ソフトロームによって圧倒的に占められていたにもかかわらず、そこから続く第二次調査地点は、むしろ第四層が第二層の下部に直接堆積する様相を呈しており、礫がかなり存在する地質構造をなしていた。

第2節 遺跡の歴史的環境

望月町に存在する遺跡は、地点からみると287遺跡であるが、それぞれを各時代別に区分してみると総数469遺跡を数える。このうち最も多いのが平安時代で42.9%、次いで縄文時代の37.5%であり、次は古墳時代の11.8%である。平安時代、縄文時代以外の時代別遺跡数はかなり減少傾向がみられる。

平安時代は、前代より続く望月町のピークを迎える時代であり、地域的な社会情勢に加え朝廷の直轄地を控えていたこともあって、人口が急増したと思われ遺跡数が極立って多い。分布地点も望月町のほぼ全体にみられる。平安時代の生産関係も盛んで、御牧原台地・八重原台地を中心にした須恵器の窯址も多数分布しており、一大窯業生産地帯を築き上げている。

縄文時代も平安時代と同様、望月町の全体に広範囲にわたって遺跡が分布しているが、特に蓼科山麓に近い程分布密度が濃くなっている傾向にある。発掘調査の成果からみると、細小路川から鹿曲川に合流する春日地域や八丁地川中流域に代表される協和地域に特に集中している。

縄文時代遺跡である下吹上遺跡周辺には、昭和62年度と平成元年度に発掘調査した平石遺跡と昭和63年度に発掘調査した上吹上遺跡が代表的な遺跡である。下吹上遺跡は、第一次・二次調査を通じて、中期後半の集落址が主体をなしており、他に若干の中期初頭からの遺物も存在するというあり方を示している。中期初頭の様相は、上吹上遺跡第4号住居址の御領ヶ台系、やや時期が下って同遺跡第6号・7号住居址が重要で、特に6号住居址の阿玉台系が代表的である。中期後半では、平石遺跡の第46号住居址の曾利I式系をはじめ各期の住居址が検出されている。下吹上遺跡の中期末葉に併行する遺構は最も検出例が多く、平石遺跡の合計48号までの住居址のうちの大部分がそれに該当する。また、上吹上遺跡第1～3号住居址も僅かな時期差は認められるものの、点在する同時期の集落の一端に加えることができる。

発掘調査を実施していない下吹上下遺跡や貴船反遺跡なども縄文時代中期の集落遺跡に含めることができ、これらも含め総合的知見に立った検討が今後必要であると思われる。

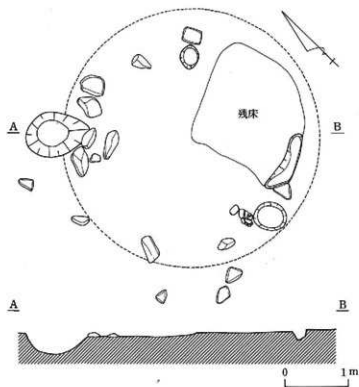
第三章 遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物

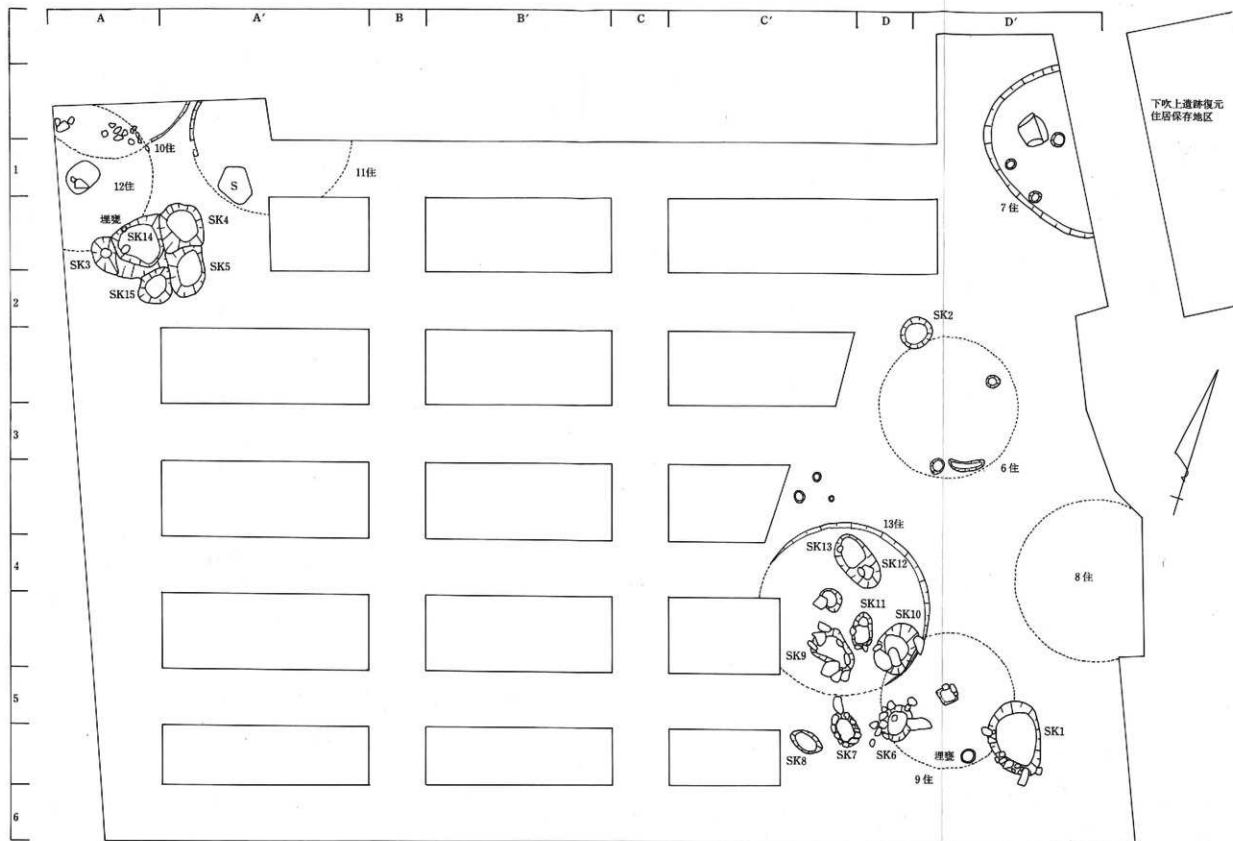
1. 第6号住居址 (第3・5図、図版三)

本住居址は、調査区の東側中央部で検出された縄文時代中期後半の住居址である。プランの大部分は破壊され、僅かに残る床面と柱穴並びに出土土器により住居址の存在を確認した。また、プランの形状は、柱穴の位置と土器並びに円形に存在する礫によりほぼ円形プランであるという想定をした。想定したプランの規模は、直径400cm程かと考えられる。残存する床面は、想定したプランの東側部に位置し、黄色砂質ロームを極めて固く締めてあり、タタキをなしたようであった。柱穴は3個検出され、50×45cm・深さ15cm、70×100cm・深さ35cm、20×15cm・深さ15cmといずれも規模が大きかった。

尚、炉はすでに破壊され、炉石のみならず掘り方そのものも破壊されており、僅かに炉址の痕跡を止めるだけであった。



第3図 第6号住居址実測図 (1:60)

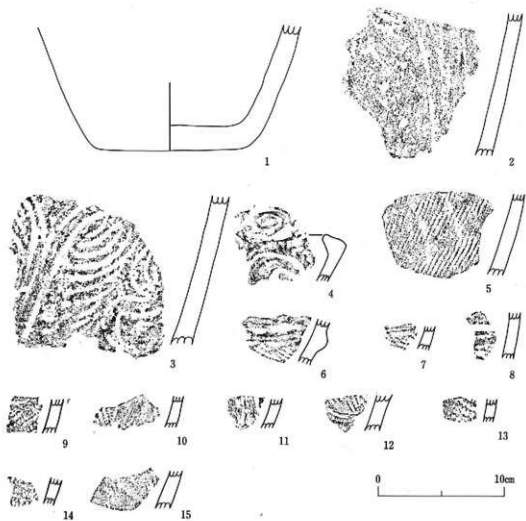


第4图 下双上遺跡(第二次調査)遺構全体图(1:100)

遺物は、縄文中期後半の土器が少量出土しているだけで、器形復元できる資料はなかった。出土した土器の多くは、残存する床面と、破壊された箇所からの出土であるが、第5図に図示した土器は、床面に含まれる状態のもの及び南側柱穴の脇から出土した資料だけを取り上げた。

第5図1は、柱穴南側から出土した土器で、中期後半の大型深鉢形土器の底部である。2・3は縦状の沈線文による器体全体の区画文と、その間に綾杉文が施文されている。4は口縁部の唐草系土器である。6-14は縄文系土器で、時期差がみられる。15は細かい櫛歯状工具による平行沈線文である。

住居址のあり方、土器の出土状況等総合すれば確実に時期を把握することはできないが、全体の様相から縄文時代中期末葉に比定される住居址であると考えられる。

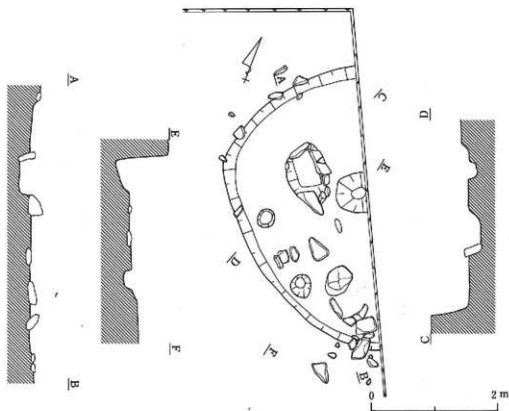


第5図 第6号住居址出土土器実測図(1:3)

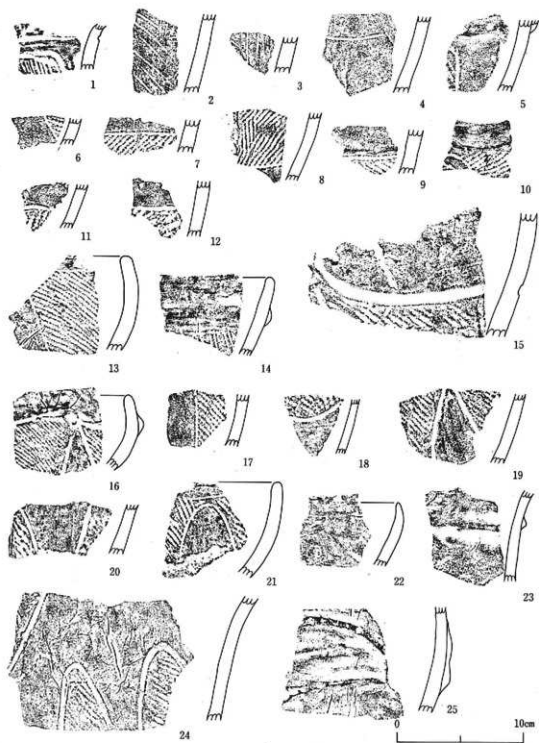
2. 第7号住居址 (第6~9図、図版四~六)

本住居址は、調査区東側のやや北寄りの位置で検出された。しかし、調査範囲が横を通る馬入れ際までであるところから、住居址のほぼ東側半分が調査区域外になってしまっており、調査することができなかった。

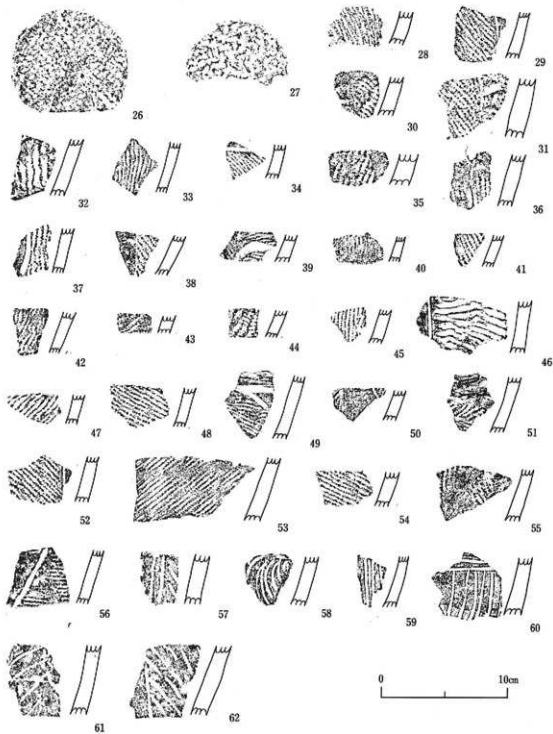
プランは、南北に長いやや楕円状の形態をなしていたと思われる。規模は推定の域を出ないが、直径450~470cmになるものと思われる。壁高は10~15cmを測り良好な状態であったが、固く締まっている程ではなかった。床は部分的に破壊を受けていたが、全体にタタキをなしたように良く締まり良好な状態であった。プランの中央部より西側に炉址を検出した。規模は東西65cm、南北100cmでかなり大きい。西側の炉石が抜け、また南側も移動した状態でずれていた。東側の炉石は、強い熱を受け割れ目が目立った。深さは25~30cmで、内部には僅かな焼土の痕跡を残すだけであった。プランのほぼ中央部には、南北63cmを測る方形の土壘が存在していた。恐らくこれは、当初の炉址ではないかと推定する。位置、形状、規模からみてほぼまちがいないだろうと思われ、確認された炉址が、余りにも西側に寄り過ぎていることからみても、その後造り変えられたものと思われる。柱穴は、西南寄りに2個検出されている。床面上には、炉址より南側に比較的大き



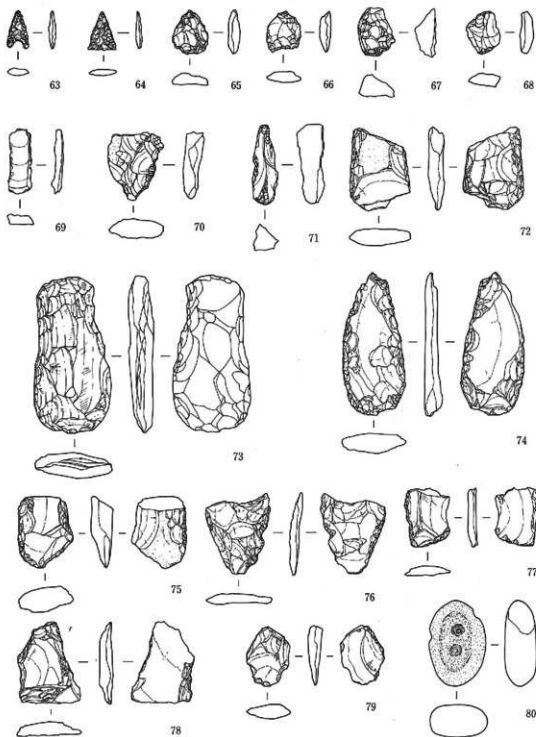
第6図 第7号住居址実測図 (1:60)



第7图 第7号住居址出土土器实测图(1:3)



第8图 第7号住居址出土土器实测图(1:3)



第9图 第7号住居址出土石器实测图 (63~71 1:2, 72~80 1:3)

な礫が集中して出土しており、住居址外へと連なっていた。

遺物は、全体に出土量は多くはないが、本調査中では遺構単位で把握のできる貴重な資料を得ることができた。第7図1は縄文時代中期後半III期の土器である。隆帯による楕円区画文と、その中に斜状沈線が施文されている。2～5は綾杉文を基調にして文様が施文されている。6～21、24は、中期最終末の縄文系深鉢形土器である。口唇部がやや内弯し、口縁部直下が張り出し、胴部中央部はややくびれ、再び底部直上で張り出すという器形をなすものである。口縁部直下に隆帯が一周するものもある。沈線による縦長状の楕円文と、その区画内の斜縄文によって文様が構成されている。第8図28～56は縄文系の土器で、時期差や文様にバラエティーがある。57～62は綾杉状沈線を基調にしたもので、大形の深鉢形土器の破片である。

第9図は、第7号住居址出土の石器である。63・64は黒曜製の石鏃、65・66はスクレイパーとも考えるが、むしろ尖頭様石器の未製品とみた方がよさそうである。69～71はスクレイパーである。72～75は、安山岩製の打製石斧で、73と74は使用痕が顕著である。76・78は、打製石斧の欠損資料である。77・79は安山岩製の大型スクレイパーである。80は、安山岩製の凹石で、長径7cm、厚さ2.5cmを測り、両面に2個ずつの凹が存在している。

石器の出土量は余り多くはないが、本住居址の性格を推定しうる鋭器が圧倒的に多く、農耕的傾向の強い住居址であると思われる。

本住居址は以上の様相から、縄文時代中期後半IV期に比定されるものである。

3. 第8号住居址(第10～12図、図版六・七)

本住居址は、調査区の東側のやや南寄りで検出された。第6号住居址と同様、僅かに残された床面と、円形に配列された礫によって住居址の存在を確認し、またプランの概略的な様相を想定した。床面は、調査区際の手入れよりやや西側地点に存在し、僅かに東西170cm、南北150cmの範囲に残されており、その他の部分は何らかの要因で削り取られてしまったものと思われる。残存部は黄色砂質ロームで小石が混入しており、タタキをなしたように極めて固く締っていた。礫は、人頭大以上のものから小石までが円形をなして存在していた。恐らく住居址周囲の周堤として構築されていたものと考え、プランの北側から西側にかけて僅かに残存していたのみであり、現状では推測の域を出ない。炉址は破壊されずに存在していなかったが、焼土が僅かに散在していた。また、柱穴は確認することができなかった。

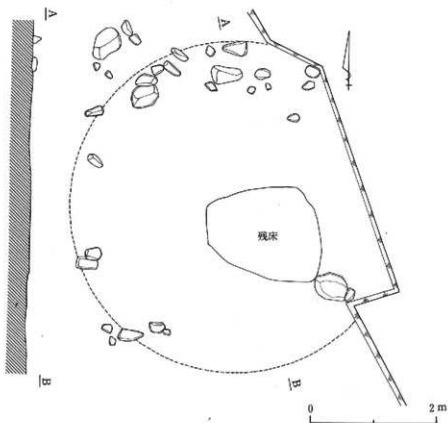
遺物は、本住居址に伴うものと伴わないものとの区分が難しかったが、残存する床面に直接接しているもののみ住居址出土遺物として取り上げた。

第11図1～3は、縄文時代中期後半III期の土器である。1は口唇部が丸味をもつ口縁部の資料で幅広い沈線による区画文と、縦状の沈線が施文され、その間に原体の太い斜縄文が施文されている。器厚は1.3cmで、胎土に小石や砂粒が混入している。2・3は同様の資料で、部厚い器体に斜縄文が施文されている。4～6は、綾杉状沈線文が施文された資料である。土器はこの他僅か

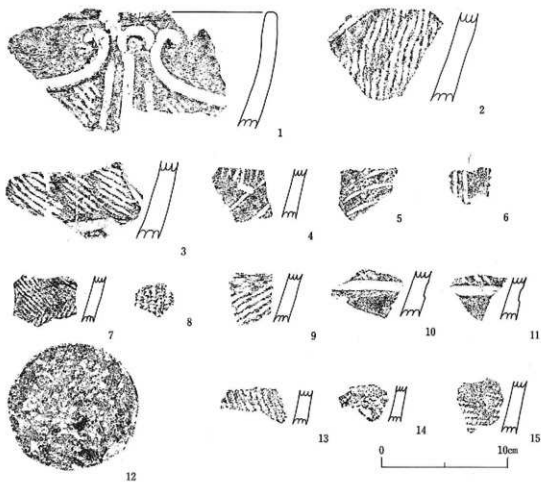
に出土例はあるが、時期差が大きいため伴出遺物としての可能性は少なく、従って、図示しなかったものがある。

石器は、第12図に示したとおり少量出土しているのみである。16は石錐で、黒曜石製である。刀部先端と側面に特にトリミングがなされている。18～21は黒曜石製のスクレイパーである。18は比較的大型で、大きく残る剥離面の縁辺をトリミングして刀部を作出している。21は、トリミングによって刀部を作出しているため石錐の可能性もあるが、一応スクレイパーの分類にした。22は、両極石器である。上部部と下部部が剥離されている。平面がほぼ方形である。23は剥片石器で、スクレイパーと理解してよいものと思われる。安山岩製の剥片を利用して刀部が作り出されている。24は打製石斧であるが、全体に摩耗が激しく、剥離面がかなり丸味を帯びている。25は安山岩製の凹石で、片面1凹になっており、両面ともよく研磨されている。26・27は磨石である。使用痕はみられない。

本住居址は、遺構の破壊された状況や、遺物の出土状況からみて詳細な時期設定はできないが、縄文時代中期後半の終末期に位置づけることができるものと思われる。



第10図 第8号住居址実測図(1:60)

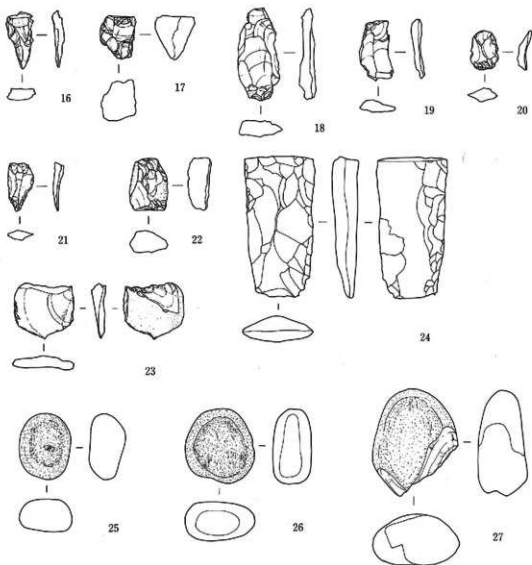


第11図 第8号住居址出土土器実測図(1:3)

4. 第9号住居址(第13~15図、図版八・九)

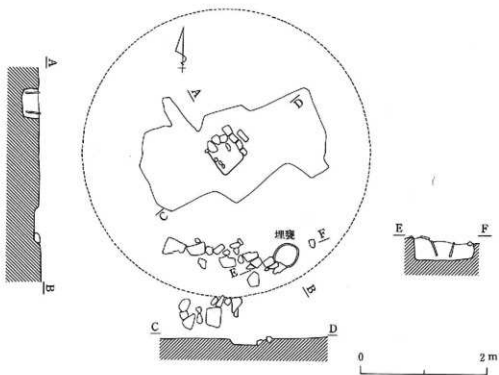
本住居址は、調査区東側のやや南寄りで検出された。第6・8号住居址と同様壁等が破壊されて存在しておらず、埋甕と炉址及び炉址の周囲に残る床面とによって住居址の存在確認と全体プランの想定を行なった。

全体プランは、埋甕がプランのほぼ南端、炉址がプランのほぼ中央かやや北寄りと想定すれば、直径450cm程の円形竈穴住居址ではなかったかと思われる。床面は、東西300cm、南北150cmの範囲に残存しており、黄色砂質ロームをタタキをなしたように固く締っていた。炉址は、やや主軸が西方向に向いており、主軸方向で60cm、幅52cmを測るほぼ方形の石囲炉である。北西側と北東側には河原石の炉石が残存していたが、熱を受け裂列が各所に入っていた。他の2方にはすでに炉石はなく、掘り方を残すのみであった。内部には焼土が僅かに存在しており、他の住居址に比べ

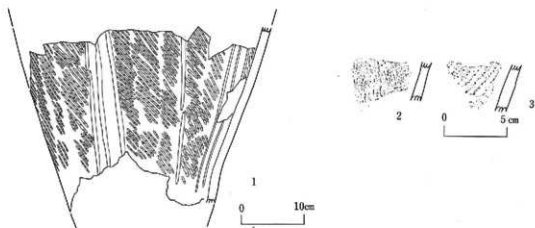


第12図 第8号住居址出土石器実測図 (16~22 1:2, 23~27 1:3)

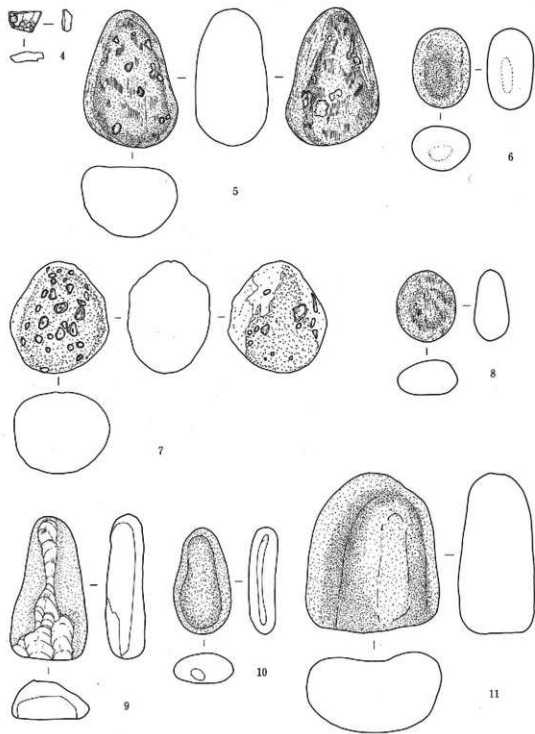
でもかなり使用した痕跡があった。埋甕は、現存部で、上部の直径42.5cm、下部直径22.5cm、器厚1.3cmを測る。底部は、埋納時に打ち欠いたものと思われるが、上部は床面よりかなりレベルが低い状態であったことをみれば、耕作あるいは、その他の状況により口縁部付近が壊されてしまったものと理解され、埋納時点では口縁部は存在していたものではないかと思われる。埋甕の内部には何も存在しなかった。埋甕の西側には、安山岩（鉄平石）を主体にした礫が平面的に存在しており、土器片や大型礫石などもここから集中して出土している。住居址の敷石の一部とも考



第13图 第9号住居址实测图 (1:60)



第14图 第9号住居址出土土器实测图 (1 1:6, 他 1:3)



第15图 第9号住居址出土石器实测图 (3 1:2, 5-11 1:3)

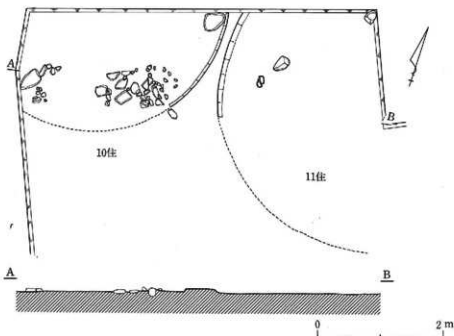
えられるが、規則制がなく、意識をして敷いたのかどうかの断定はできない。

遺物は、第14図の土器及び第15図の石器がある。1は埋甕で縦状の沈線による区画文と、その間に縄文が施文された大型の深鉢形土器である。2はへら状工具による調整痕の残る無文土器である。石器は、4が黒曜石製のスクレイパー、5・7・8は全体が研磨された多孔石である。6と10は磨石、9は敲石と理解してよいと思われる。11は石皿で、余り凹がない。

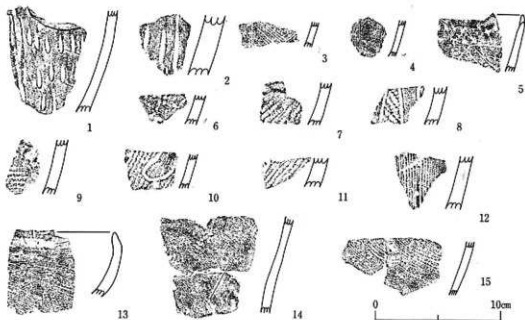
5. 第10号住居址 (第16~18図、図版十)

本住居址は、調査区の西部北端で検出された縄文時代の竪穴住居址である。本址は、調査区域際のコーナー部に当り、全体の4分の1弱が調査することができただけで、他の4分の3は、調査区域外であり、調査することができなかった。検出できた部分のうち、壁を把握できたのは南東部の僅かな部分であり、この壁により規模の推定をすることができた。規模は推定直径で440cm程になるものと思われる。南側には壁は存在していなかったが、偏平な礫が集中しており遺物もここに僅かに伴っていた。調査可能部分においては、炉址及び柱穴は検出することができなかった。

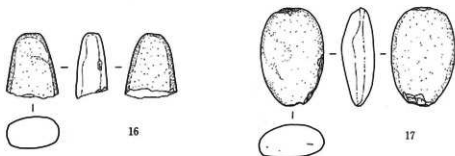
遺物は、僅かな土器及び石器が出土しただけであった。土器は、第17図1、2は、両垂れ状の沈線文が描かれており、2は1.5cmと極めて厚い。3~5は、かなり細い沈線で区画文と稜形状の文様が施文されている。13~15は、歯状工具による沈線文が施文されており、器厚は、0.5~0.8



第16図 第10・11号住居址実測図 (1:60)



第17図 第10号住居址出土土器実測図(1:3)



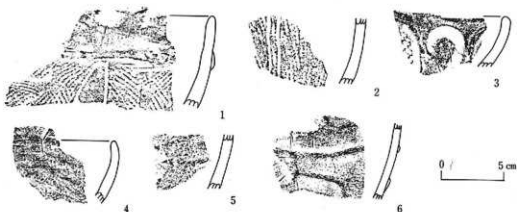
第18図 第10号住居址出土石器実測図(1:3)

cmとバラエティーがある。石器は、第18図16と17で、16は磨石、17は両端に使用痕をもつ敲石である。比較的良く使用されており、打撃による剝離痕が極部付近に見られた。

本住居址は、僅かな遺物から縄文時代中期後半に比定されるものと思われる。

6. 第11号住居址(第16・19~20、図版十・十一)

本住居址は、調査区西側で第10号住居址の東側に隣接して検出された。第10号住居址と同様ブ

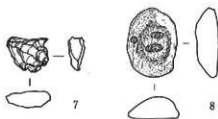


第19図 第11号住居址出土土器実測図(1:3)

ランの大部分が調査地区外になってしまっていたため、検出できた部分はプラン西南部の壁だけが検出されたのみで、床も固く締っている様子もなく、炉址も調査地区外に当たってしまった。しかし、住居址の状態はどうか、存在を確認したということは重要で、下吹上遺跡全体の把握のためには貴重な資料である。

遺物は、第19・20図に示したとおりである。第19図1～6は、いずれも縄文時代中期末葉の土器で、1と2は無文帯をもつ口縁部直下に、横走る隆帯の貼付がある。胴部には、上部が尖がる縦長の楕円区画が描かれ、その周囲を縄文が施文されている資料である。3はやや1・2よりも時期の下る資料で中期後半Ⅲ期に比定される。4は無文土器、5と6は、地文は無文であるが、

器面に対して隆帯の貼付により文様構成がなされている。石器は、第20図7・8の2点と他にフレイクが出土している。7は機能、用途は不明であるが、全体に加工痕の残るものである。8は安山岩製の凹石で、両面が研磨され、凹部も複数残されている。



第20図 第11号住居址出土石器実測図
(7 1:2, 8 1:3)

本住居址は、プランの状況や遺物の出土状態からみて時期設定をするのは非常に困難であるが、あえて位置づけておくとしたら縄文中期後半の終末期になるものと思われる。

7. 第12号住居址(第21～23図、図版十二・十三)

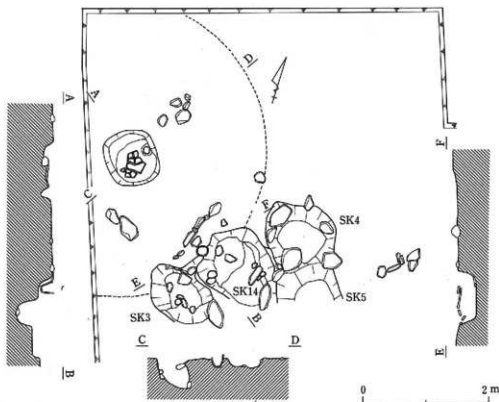
本住居址は、調査区の西部地域で検出され、第10号住居址の南側に位置し、複合関係をなして

いる。他の住居址と同様に全体が破壊され、壁が全く残存していない状態であったが、炉址及び埋壘、あるいは残存する床面等によって存在を確認することができた。

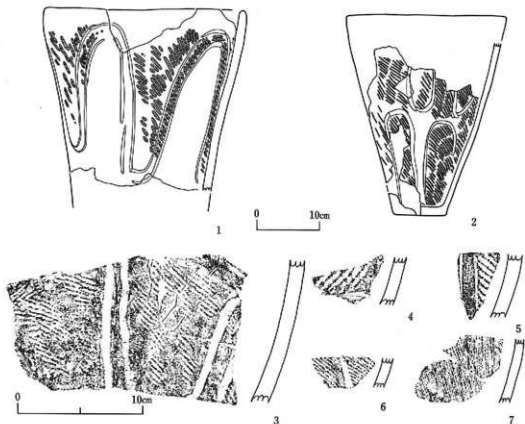
プランの様子は、炉址がプランの中央部がやや北寄り、埋壘は炉址を通過する主軸方向で南寄りの東南側と仮定した場合、炉址と埋壘の距離から直径450cm程の住居址であったと推定される。従って、プランの西側半分が調査地区外になってしまったことになる。また、東南部には、第3・5・14・15号土壌が存在し、そのうち第3・14号土壌が住居址を切る状況で構築され、複合関係をなしていた。

炉址は、本来は石囲炉であったと思われるが、現状では石の存在は全くなく、掘り方のみが残存していた。掘り方の規模は、埋壘にかかる主軸方向で92cm、直交する幅は83cm、深さ15～20cmを測る。内部は長期間使用したことを示すように全体が赤褐色に焼け、焼土や灰が比較的多く堆積していた。底面には円礫が1個入っており、この礫に乗るように中期末の土器が出土した。この土器は、意識的に炉底部に敷かれた状態であり、展開して存在していた。

埋壘は、底部は存在していたが胴部中央から口縁部にかけては欠損していた。住居址の破壊状況や、土壌との切り合いなどの状況から意識的に打ち欠いたのか、あるいは後の段階で欠かれてしまったのかは現状では判断がつかない。検出段階では、土壌の壁面に埋壘の半分近くが露呈し



第21図 第12号住居址実測図 (1:60)



第22図 第12号住居址出土土器実測図（1・2 1：6，他1：3）

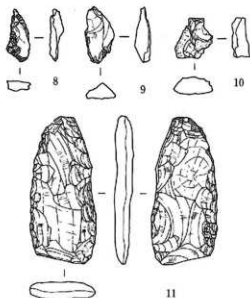
ている状況であった。底径は8.2cm、高さは現状で21.5cmを測り、高さ32～33cm程の中型の深鉢形土器を使用していた。内部には堆積した土以外は何も検出することができなかった。

床面は、炉址から埋塞にかけて良く残っており、極めて固い程ではないが良好な状態で検出することができた。床の表面は小石が入り込んでいる部分もあり一様ではないことも特徴の一つであった。床面上には、礫が存在し、特に炉址の東側及び南側と埋塞の周囲に集中していた。いずれも小規模なグループに分けることができる。

遺物は本址周辺から比較的多く出土しているが、住居址の破壊状況から伴出遺物を特定することは極めて難しいため、炉址内部と埋塞に限って取り上げた。

第22図1・3～7は炉址内より出土した土器である。1は前記したように炉址底部に展開して敷かれていた資料である。口縁部直径31.5cm、残存する高さ28cm、器厚1.3cmを測る。文様構成は沈線による縦長の波状文が施文され、波状が上部に開口する部分のみに縄文が描かれている。恐らく欠損している下部は、同図2の埋塞と同様に、波状文が相対して施文され、縄文も描かれているものと思われる。器面は二次焼成を受けており、所々赤褐色を呈しているが、全体に黄茶褐

色で、胎土には僅かな砂粒が混入しているだけであり、焼成良好な土器である。2は埋壙であり、1と同型式の資料である。胴部上半部が欠損しているが、1と同様の波状の文様形態になる。胎土には、やはり砂粒や小石が混入しているが、全体になめらかであり黄茶褐色を示す焼成良好な土器である。3は炉址内より出土した大形の破片で、1と伴に敷かれていたものである。沈線文と地文の縄文により文様構成がなされている。4～6も同様の土器で、若干の時期差がみられる。7は、歯状工具により施文された条痕状の平行沈線文である。縄文中期末葉に位置づけられる本系列の土器は、7のように沈線が直線状に施文されるものと流水文状に曲線あるいは渦



第23図 第12号住居址出土石器実測図
(8～10 1:2, 11 1:3)

巻状に施文されるものがある。時期差はほとんどないと思われる。夢科山北麓地域には、縄文中期末の段階になると普遍的に伴う状況にあるが、土器セットにおける主体をなすものではない。

石器は、第23図の他に黒曜石のスクレイパーやフレイクが出土している。8はナイフ型石器とみられ、一部に鋭利な刀部を作り出し、その周囲は丁寧な剝離整形がなされている。9はスクレイパーである。10は加工痕のあるフレイクである。11は打製石斧で、刀部が僅かに欠損しているが、全体に丁寧な加工がなされている。

本住居址は、炉址内出土土器及び埋壙により、縄文時代中期後半IV期の住居址である。

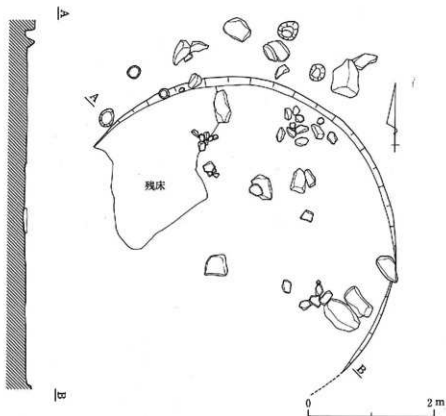
8. 第13号住居址 (第24～26図、図版十三・十四)

本住居址は、調査区東側のほぼ中央部で検出された縄文時代中期の竪穴住居址である。プランは西南部割に当たる半分が破壊されて存在していない。また、壁面が検出された箇所であっても全体に保存状態が良いとはいえず、かろうじて残りのプランを検出した状態であった。規模は、直径53.5cmと大きく、第二次調査で検出された住居址の中では最大である。壁は、プランの北方向の半分が検出され、高さは6～10cmと低い。耕作等により上部が大部削り取られてしまっているものと思われる。タタキをなしたような極めて固い床面の一部が北側から検出されたが、その他の部分は、かなり荒れていて、二次的な破壊があったような感を受けた。住居址外の北側に5個の柱穴が検出されたが、その他の地点には検出することができず、本址に伴う柱穴かどうか確定することは難しいところである。

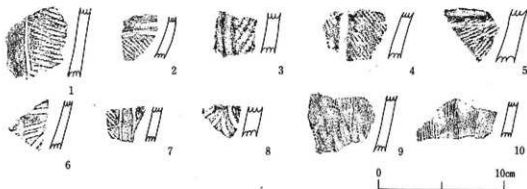
床面には、住居址外にもかけて比較的大きな礫が散乱しており、住居址との関連が問題になる

ところであるが、状態からみて直接関係なさそうである。

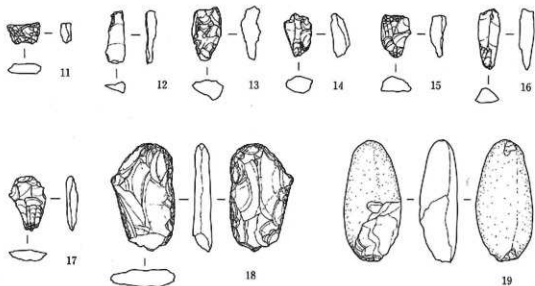
遺物は、第25・26図に示されたとおり、僅かな土器及び石器が出土している。いずれも中期後半の資料で、1～5は縄文系、6～8は唐草文系の綾杉文の施文がされている土器である。9・



第24図 第13号住居址実測図 (1 : 60)



第25図 第13号住居址出土土器実測図 (1 : 3)



第26図 第13号住居址出土石器実測図 (11~17 1:2, 18・19 1:3)

10は、櫛歯状工具による条痕状の平行沈線文である。

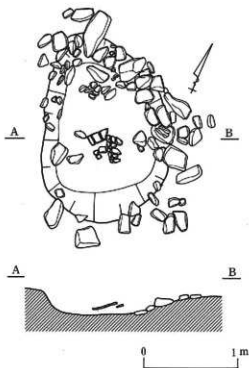
石器は、11が石鏃の欠損品、12・13はスクレイパー、15~17は両極石器である。18は打裂石斧、19は敲石である。

本住居址は、若干の遺物や住居址の形態からみて、縄文時代中期後半の終末期に比定されるものである。

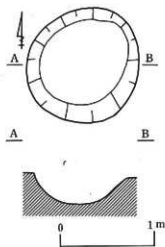
9. 第1号土壌 (第27・28図、図版十四)

第1号土壌は、調査区東側の第9号住居址に隣接して検出された。規模は、東西200cm、南北135cmで、平面が南側に広がる卵形をなし、深さ25cmを測る。土壌の縁から内部の壁まで、人頭大から拳大以下までのさまざまな礫が堆積していたが、土壌内部に堆積土とともに入り込んではいなかった。周囲の形成層の状況が不明確ではあるが、自然堆積した礫の存在する地点に本土壌を構築したのではないかと思われ、その結果、上部から壁にかけて礫が突出していたのではないかと考える。内部に堆積していた土は黒褐色を示していた。床は、南側にやや傾斜する傾向はあったが、ほぼ水平であり、礫の突出はみられなかった。

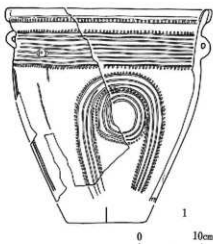
遺物は、第28図に示した1個体分の深鉢形土器が、押しつぶされ展開するように出土した。口縁部の直径32cm、頸部で30cm、胴部の張出部30cm、現高28cmを測る。底部が欠損しているが、推定高は34~35cm程であったのではないかとと思われる。口縁部は折り返しになりやや肥厚しており、その直下に器面を一周するように鋸歯状の刻み目が入られている。さらに無文帯をおいて、同



第27図 第1号土坑実測図(1:40)



第29図 第2号土坑実測図(1:40)



第28図 第1号土坑出土土器実測図(1:6)

様に一周する刻み目が施文されている。頸部がややくびれており、ここに横走する9本の沈線が施文され、最下部の沈線直下にさらに刻み目が施文されている。また、頸部には隆帯を半円にした小さな把手がつけられている。胴部はやや張り出しており、渦巻状の沈線文と、それを覆うように4重の沈線が底部にかけて施文され、内部には同様に鋸歯状の刻み目が施文されている。

時期は、縄文時代中期初頭に比定されるが、器形及び文様形態がかなり特異な資料であるとともに、当地域である蓼科山北麓においても類例が知られていない。関東地方の影響を受けつつ、地域に根ざした特異なパターンを作り出したのかも知れない。

これらの状況から、第1号土坑は縄文時代中期初頭に比定されるものであるが、性格等は不明である。



第30図 第2号土坑出土土器実測図(1:3)

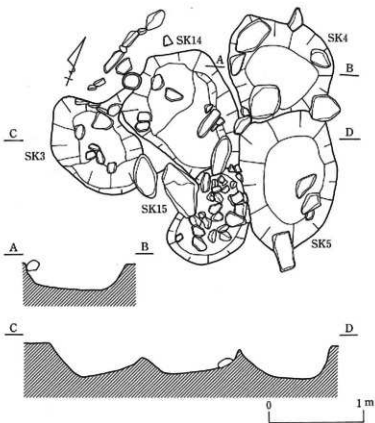
10. 第2号土壌

(第29・30図)

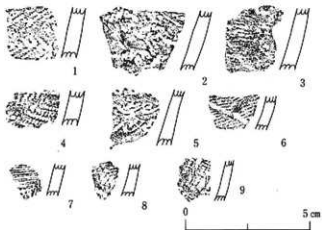
第2号土壌は、調査区東側の第6号住居址と複合関係をなして検出された。規模は、東西110cm、南北110cmとほぼ円形をなし、深さ26cmを測る。底面はやや丸味を帯びているが全体に平坦である。

遺物は、第30図に示した無文土器と単節縄文が施文された土器だけであった。

従って、本土壌の時期及び性格は不明といわざるを得ないが、集落内における土壌の位置づけとして、縄文時代中期に比定することができると思われる。



第31図 第3-5, 14・15号土壌実測図(1:40)



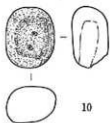
第32図 第3号土壌出土土器実測図(1:3)

11. 第3号土壌

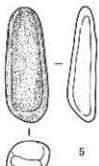
(第31-33図、

図版十五・十六)

本土壌は、調査区西側で、他の第4・5・14・15号土壌とともに一定箇所に集中して存在しており、群として把握すべき性格のものかも知れないが、一応個別に基礎資料として



第33図 第3号土壌出土
石器実測図(1:3)



第35図 第4号土壌出土
石器実測図(1:3)



第34図 SK4土壌出土石器実測図(1:3)

記載しておくものとする。

規模は、東西75cm、南北120cm、深さ35cmを測る。平面形態は、真正ではないが楕円形をなしており、内部は各所に礫が突出していた。

遺物は、第32図に示したとおり縄文中期土器が出土しているが、ほとんどが後の流れ込みと思われる、土壌と伴出したものではないと思われる。また、石器(第33図)は、凹石と黒曜石のフレイクが出土している。

12. 第4号土壌(第31・34・35図、図版十五・十六)

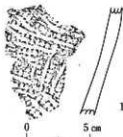
本址は、調査区西側の土壌群中の一角を構成しており、第5号土壌と接している。規模は、東西112cm、南北110cm、深さ30cmを測る。内部には、20-40cmの大礫が幾つも入り込んでおり、また壁にも突出している状態であった。底面は比較的平坦であり、状態がよかった。

遺物は、縄文中期土器(第34図)が僅かに出土し、石器(第35図)は楕円形の磨石が出土している。出土状況からみて、いずれも後の流れ込みの可能性が高い。

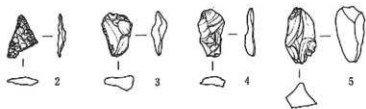
13. 第5号土壌(第31・36・37図、図版十五)

本址は、第4・14・15号土壌に接して検出されており、接点部はすでに一部崩壊している状態であった。規模は、東西100cm、南北150cm、深さ35cmを測り、一連の土壌の中で、第14号土壌に次いで大きい。平面形態は楕円形をなし、内部には大きな礫が混入していた。

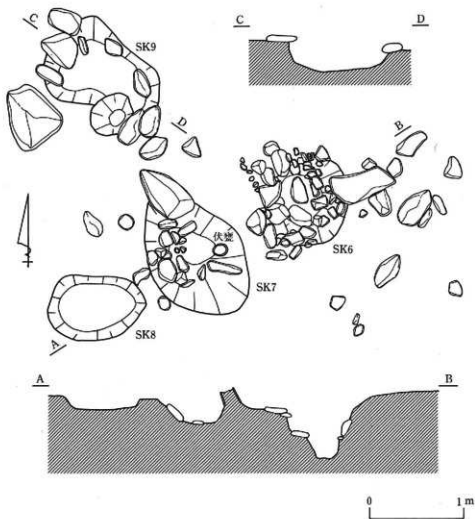
遺物は、第36図1の縄文時代前期の関山式土器と、石器では第37図2の石鏃、3・4のスクレイパー、5の両極石器が出土している。出土状況は、覆土内に混入した状態であり、後の込みとみられる。従って、本土壌の時期及び性格は不明といわざるを得ない。



第36図 第5号土壌出土石器
実測図(1:3)



第37図 第5号土壌出土石器実測図(1:2)



第38図 第6～9号土坑実測図（1：40）

14. 第6号土坑（第38図、図版十六・十七）

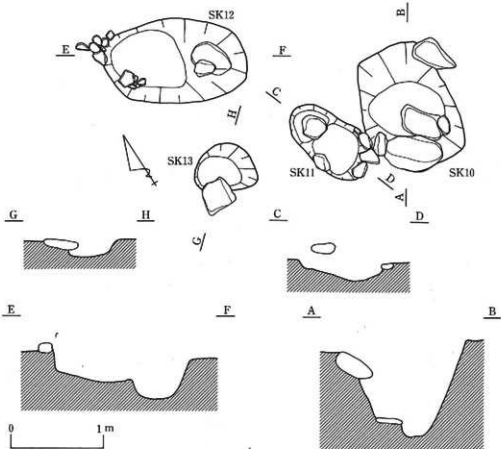
本址は、調査区東側で第9号住居址に隣接して検出された。規模は、東西90cm、南北100cm、深さ70cmを測る。土坑の縁から内部にかけて、大小の多量の礫が存在していた。礫は壁にまで突出しており、地山中に混入していたものとも思われるが、生活面の礫は、集石された感がある。規模に比較して70cmとかなり深い土坑であり、土坑墓的な要素が考えられるが、現状では不明といわざるを得ない。遺物は、内部から黒曜石のフレイクと小片の土器が出土しているが、覆土からであり、時期設定に足る資料ではなかった。

15. 第7号土壇 (第38・39図、図版十六・十七)

本址は、第6号土壇と第8号土壇とに挟まれて検出された。規模は、東西100cm、南北143cmで、楕円形をなしていた。楕円形の北側に当る位置に65×35cmの大礫が存在し、また内部にも拳大から人頭大程の礫が入り込んでいた。深さは25～30cm程であり、底面は50×35cmを測り、比較的平坦であった。土壇の掘り切り部に当る位置に、口縁部を下に向けたいわゆる伏甕が出土した。胴部の中央部から下半は欠損させ、割れ口を極めて丁寧に研磨した疑似口縁を作り出してあった。口縁部直径18cm、疑似口縁部直径12.9cm、現行の高さ15.5cmを測る。器面全体に綾杉状の文様が施文された唐草文系土器であり、縄文時代中期後半IV期に比定されるものである。この伏甕と土壇及び北側に存在する大礫などの状況を総合すると、本址の性格は土壇墓ではないかと考えられ、第6号土壇等集中する一連の土壇群の性格を把握する上で重要な資料となりうるものと思われる。



第39図 SK7土壇出土土器
実測図 (1:6)



第40図 第10～13号土壇実測図 (1:60)

16. 第8号土壙 (第38図)

本址は、第7号土壙の西側に隣接して検出された。規模は、東西106cm、南北68cm、深さ10cmを測る。平面が楕円形を呈しており、礫の混入はなく、浅い土壙であった。

遺物は、黒曜石のフレイクが少量出土したのみである。

17. 第9号土壙 (第38図)

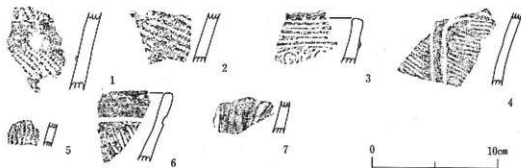
本土壙は、第8号土壙の北側に隣接して検出された。規模は、北西—南東方向で140cm、北東—南西方向で70—96cm、深さ32cmを測る。また、この土壙を切るように、南側に接して柱穴状の遺構が確認された。土壙の周囲は拳大から人頭大の礫が集中しており、第6・7号土壙とかなり近似する傾向をもっていた。

出土した遺物は何もなかったが、検出状況からみて時期及び性格は第6・7号土壙と同様と考えられる。

18. 第10号土壙 (第40・41図、図版十六・十七)

本址は、第9号住居址と第13号住居址との間で検出された。規模は、東西100cm、南北137cm、深さ104cmを測る。平面は隅丸の方形に近い形態をなしており、底面は楕円形をなしていた。内部には60×40cmの大礫から拳大までの礫が入り込んでいたが、土壙に伴って入れたものではなく、後に入り込んだものと思われる。

遺物は、第41図に示したように、縄文時代前期前半の土器1・2、中期前半の土器3～5、中期後半の土器6、後期前半の土器が出土している。図示した土器以外にも小片が数片出土しているが、図示した土器も含め本址に当初から伴出するものではなく、後に入り込んだものと考えられる。また、石器は黒曜石製の加工痕の残る石器の小片やスクレイパーが僅かに出土しているが、いずれも後に流れ込み等により入り込んだものと考えられる。



第41図 第10号土壙出土土器実測図 (1 : 3)

19. 第11号土壙 (第40図)

本址は、第10号土壙の西側に接して検出された。規模は、東西93cm、南北57cm、深さ10~24cmを測る。二つのビット状の土壙が連結したようなダルマ形の形状をなしており、従って底面は二段になっていた。やはり本址の内部には礫が入り込んでいた。

遺物は、土器の小片と黒曜石のフレイクが出土しただけであり、これらの遺物も本址のために存在しているものではなく、後に流れ込み等により入り込んだものであると思われる。

20. 第12号土壙 (第40図)

本址は、第10号土壙の西側に隣接して検出された。規模は、東西165cm、南北90cm、深さ32~47cmを測る。平面は楕円形をなしていたが、底部が二段になっていたところから、切り合いの結果とも考えられるが現状では把握できない状況であった。土壙の掘り切り部と内部の一部に拳大の礫がまとまって存在していた。土壙底部は、西側は浅くてやや東側に傾斜し、東側の底部は深く全体にU字状を呈していた。

遺物は、縄文時代中期土器の小片が僅かに出土しただけであり、土壙の性格等を把握する資料は何も出土していない。

21. 第13号土壙 (第40図、図版十五)

本址は、一連の第10~12号土壙の南側に隣接して検出された。検出された土壙の中では最も小さく、規模は、東西57cm、南北52cm、深さ19cmを測る。平面形態はほぼ円形に近く、底面は水平である。土壙の掘り切り部には扁平な礫が存在していたが、土壙とは関係なく後世に移動したものであろうと思われる。

遺物は何も出土しなかった。

22. 第14号土壙 (第31図、図版十五)

本址は、調査区西側の土壙群の一角に位置しており、一群の中では最も規模が大きく、東西140cm、南北110cm、深さ28cmを測る。隣接する第3号及び15号土壙と壁の上部が共有となっており、やや崩壊している部分がある。他の土壙と同様に礫が入り込んでいた。

遺物は、縄文時代中期土器片と黒曜石のフレイクが僅かに出土しただけであった。

23. 第15号土壙 (第31図、図版十五)

本址は、調査区西側で検出された土壙群の一角に位置しており、第5号及び14号土壙と隣接している。規模は、東西75cm、南北107cm、深さ28cmを測る。平面は楕円形をなし、底面はほぼ水平であったが、全体に多量の礫が混入していた。

遺物は縄文時代中期土器の小片が出土しただけであった。

第2節 遺構外出土遺物

1. 縄文時代の土器

下吹上遺跡の遺構外から出土した遺物は、縄文時代早期後葉から中期末葉ないし後期初頭にかかる段階までの土器が出土し、また、石器は遺構から離れると時期設定が難しいが、土器の存在する時期に比定されるであろう資料が出土している。

出土した土器は、段階的に、早期後半の土器群、前期前半の土器群、中期前半の土器群、中期後半の土器群の大きく4群をもって把握することができる。

(1) 早期後半の土器群 (第42図1-14、図版十八)

本群の土器群は、野島式に比定することができる。1-13は同一個体とみられ、極めて薄手で繊維の混入はなく、胎土が良く精練されており、赤褐色を示す焼成良好の土器である。文様構成は、ヘラ状工具によって器面全体を調整し、その後極めて細い粘土紐を貼付している。いわゆる隆起線文の中でも微隆起線文の分類に入るものである。ほぼ同一方向に走る微隆起線に対して、綾杉状(矢羽根状)に微隆起線が平行して施文されている。

野島式土器は、夢科山北麓地域では初めての発見であり、非常に貴重である。

(2) 前期前半の土器群 (第42-43図、図版十九)

出土した前期前半の土器は、多くは関山式系の資料が圧倒的に多く、文様構成はバラエティーに富んでいる。第42図16-18、24-26、30、33、39は、施文原体の末端が押圧されている部分が残っている資料で、比較的厚手で胎土に繊維が多量に混入している。第42図23、第43図15は、異条縄文であり、独特のハの字状の縄文が施文されている。第43図11、14、21、31、32は羽状縄文が施文されている資料で、全体に繊維の混入が激しく厚手である。その他は、異斜縄文や斜縄文、結束縄文などがみられる。

下吹上遺跡第一次調査において、関山式期の住居址(報告書では黒浜式となっているが、関山式が正しい)1棟が検出され、破片ではあったが良好な土器が多数得られており、この住居址との関連も、今後の検討の重要な課題である。

(3) 中期前半の土器 (第43図36・37、図版十九)

第43図37は、九兵衛尾根Ⅱ式に比定される土器の口縁である。口縁部には斜縄文が施文され、その直下に2本の沈線文が巡り、沈線に直交するように6本の沈線を縦方向に施文している。口縁部の内面には段があり、口唇から段にかけて3本の沈線文が施文されている。全体に黄褐色を示し、胎土も比較的整った資料である。36は、横走する数本の平行沈線とその間に竹管による交互刺突が施文されている土器である。

中期前半の土器は、平石遺跡・上吹上遺跡・後沖遺跡・竹之城原遺跡等で良好な資料が出土しており、総合的な検討ができる段階にきたといえる。

(4) 中期後半の土器 (第44-46図、図版二十・二十一)

中期後半の土器は、本遺跡の中心的な時期であり出土量は最も多い。時期は、中期後半Ⅲ期の一群（第44図7～第45図7）の土器、及び中期後半Ⅳ期の一群（第45図8～第46図28）の土器が出土している。いずれも厚手で大形の深鉢形土器の破片であるが、Ⅳ期の資料の方がより大形の器形であったと思われる。これらⅢ期の土器は、沈線による区画文を描き、縄文が施文される部分と無文部を分けて文様構成がなされている。第44図7は、かなり幅広い半截竹管状の工具で渦巻沈線文が施文されている。

Ⅳ期の土器は、沈線により口縁部直下に横長の楕円区画文が施文（第45図8・9）され、区画文の内部には併行沈線がさらに施文されている。胴部には綾杉状沈線文が基本的に施文されている。第45図29・31は、雨垂状沈線により綾杉状沈線系列の文様が施文されている。第46図2～6は、歯状工具による沈線が施文されている資料で、Ⅳ期の中でも最終末に位置づく資料である。同図1は、口縁部が波状になり、隆帯による簡単な文様が施文されているだけで、地文は無文の土器である。第46図7～28は、口縁部は無文で、その直下に隆帯が一周するものと、くの字状に屈曲するものがあり、この部分から沈線による縦長の楕円区画文が描かれ、楕円状になる部分は無文、他の部分には縄文が施文されるという文様の基本構成をもつ土器である。

本群の土器は、後期へと連なる過渡的な土器ともいってよく、八丁地川水系で実施された一連の発掘調査で出土例が増加してきている資料である。

2. 縄文時代の石器（第47～50図、図版二十二・二十三）

下吹上遺跡から出土した石器は、あまり多くはないが、遺構から出土した石器に比べれば、遺構外から出土した石器の方がはるかに多い。

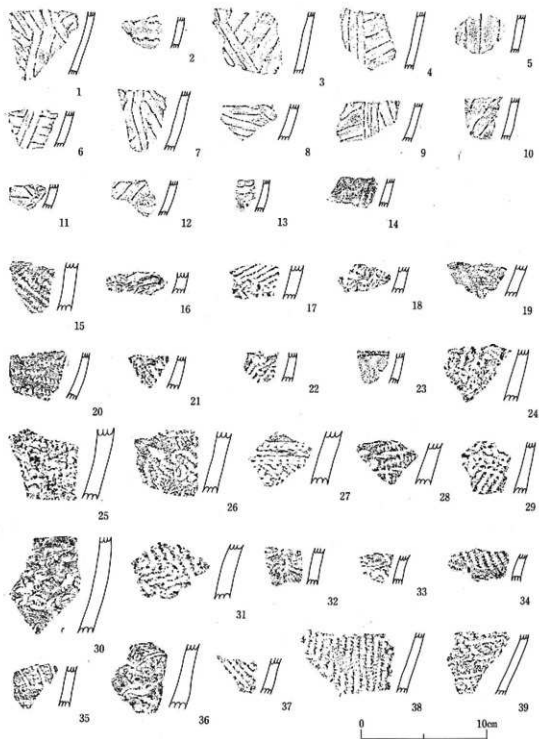
第47図1～5は石鏃である。長身鏃1・2と三角鏃3～5が出土している。6～7は石錐、8～11はスクレイパー、9～15は両極石器である。いずれも黒曜石製である。同図16～20、第48図、第49図1・2は打製石斧である。打製石斧は、短冊型が圧倒的に多いが、第48図9・10のような真正でない形態をもつもの、第49図2のような柄付けの挟入部のみられるものがあり、また刃部の形態は、石斧の正軸に対して直角かつ対称に作られているものと、非対称である片刃になるもの（第47図18、19、第48図9、第49図1）などに分類できる。

第49図3～5は大形のスクレイパーである。3は、剥片の全周に対して刃部が作出されている。4は、大きな剥片の一辺に刃部が作出されている。5はかなり丁寧な剥離がなされている。

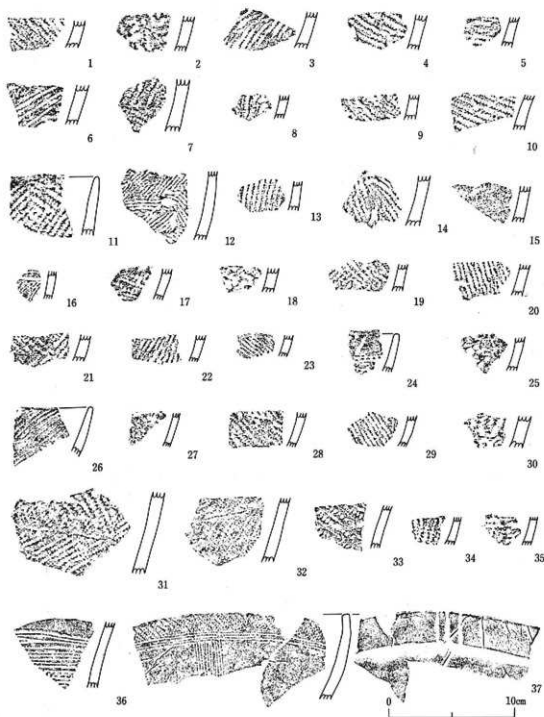
第49図6～14は凹石である。砂岩及び安山岩製が圧倒的に多く、両面が研磨され、1個ないし2個以上の小凹が作出されている。部分的に敲石の機能をもつものがある。

第49図15～18、第50図1～12は磨石で、12は敲石として把握することができる。

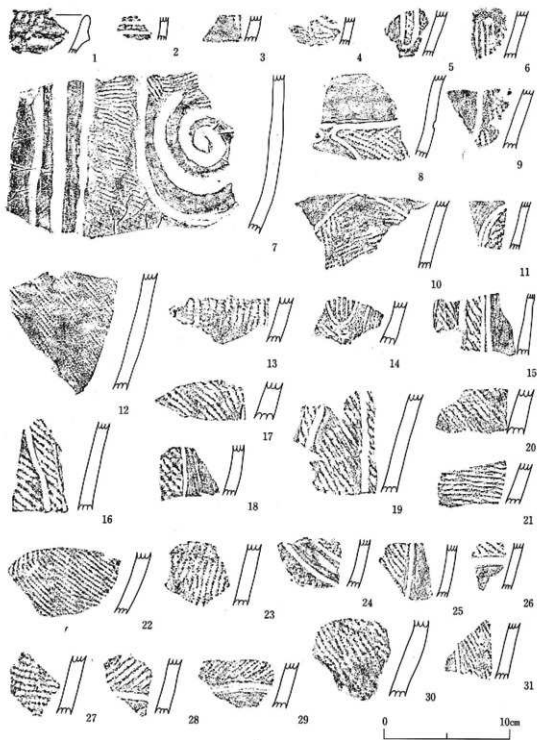
第50図13・14は石皿である。掘りの部分は浅いが良く使用されている。



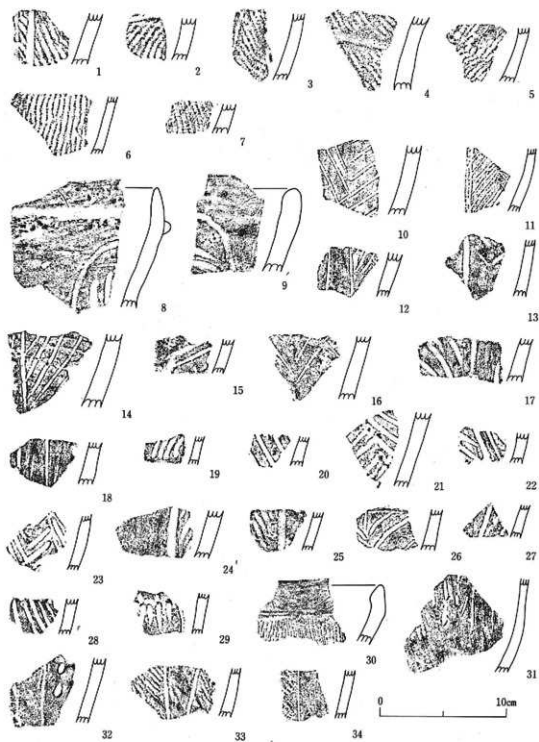
第42图 遼構外出土土器実測图 (1 : 3)



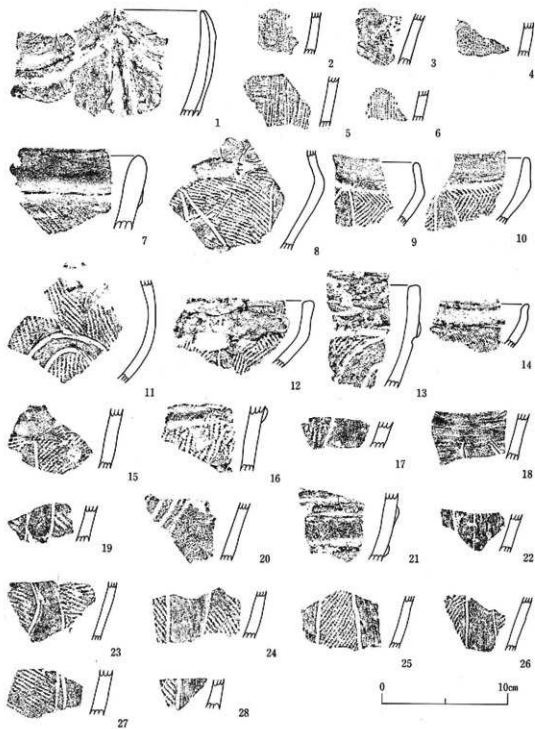
第43圖 遠橋外出土土器実測圖 (1:3)



第44图 遗物出土土器实测图(1:3)



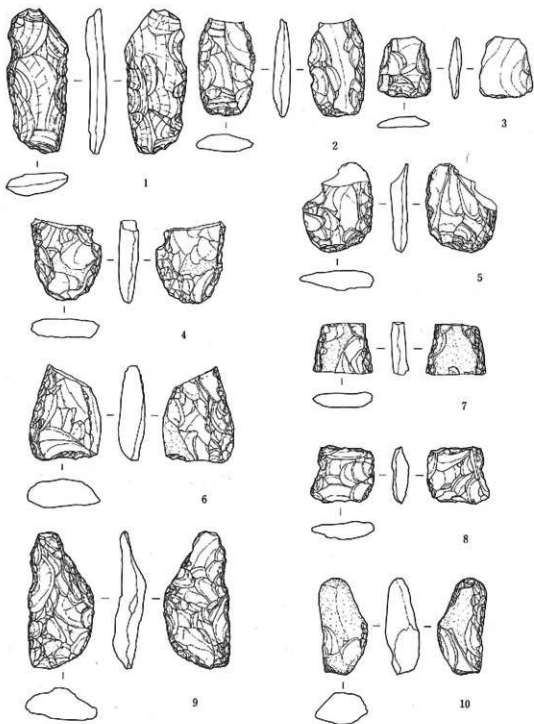
第45图 遺構外出土土器実測図(1:3)



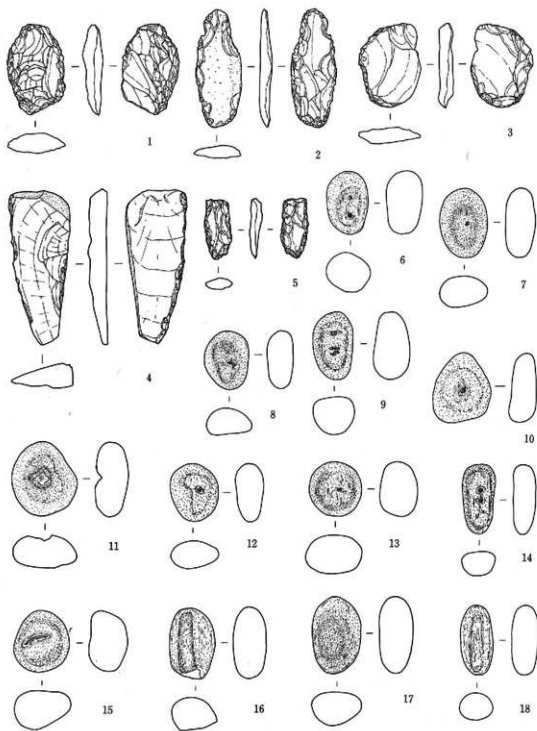
第46图 遗構外出土土器実測図(1:3)



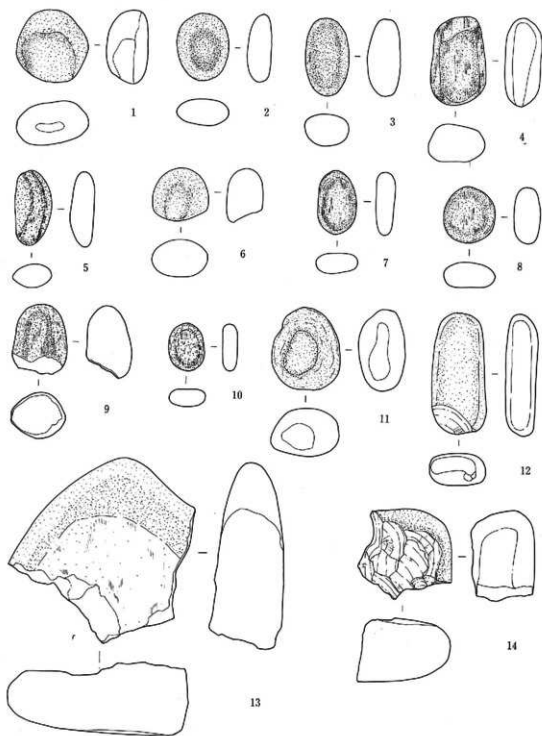
第47图 遼構外出土石器实测图 (1~15 1:2, 16~20 1:3)



第48图 道溝外出土石器実測圖(1:3)



第49图 淮阴外出土石器实测图 (1:3)



第50圖 遺構外出土石器実測圖 (1~12 1:3, 13·14 1:6)

第IV章 総 括

下吹上遺跡発掘調査は、第一次調査が昭和51年11月に実施され、住居址6棟が検出された。そして本発掘調査は第二次調査であり、平成2年5月～6月にかけて実施され、住居址8棟、土壌15基が検出された。これらの事業の経過についてはすでに記載したところであるが、内容についての概要と若干の考察を加え総括とするものである。

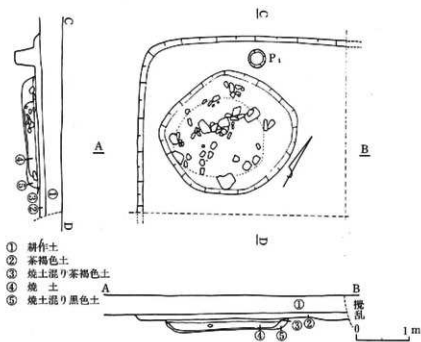
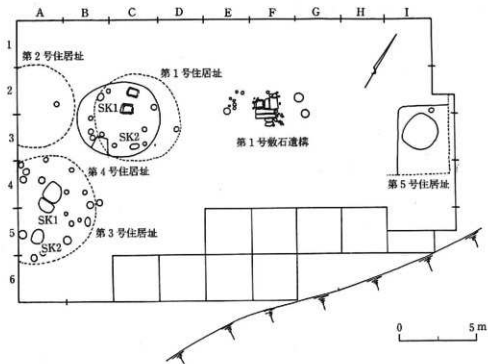
下吹上遺跡は、夢科山を源流とする八丁地川中流の左岸河岸段丘に位置しており、一連の縄文時代遺跡群を構成している。これらの遺跡は、平石遺跡、上吹上遺跡、下吹上下遺跡、貴船反遺跡(八丁地川を臨む丘陵)、そして下吹上遺跡で、ここに遺物散布地として、山ノ神A遺跡が加わり遺跡群を構成している。すでに下吹上遺跡と貴船反遺跡を除き発掘調査が実施されており、部分的にでも状況が把握されており、しかも、下吹上下遺跡は下吹上遺跡と同じ段丘上の連続する遺跡で、表面採集遺物も下吹上遺跡と同様であり、貴船反遺跡は、昭和51年度にゴミ焼却の穴を掘った際に、断面に敷石住居址とみられる一部と炉址及び縄文時代中期後半IV期の深鉢土器が出土したことを確認しているため、これら一連の遺跡はおおむね性格が把握されている。

遺跡群からみると、縄文時代早期前半と前期後半、後期後半、晩期の段階が未だ確認されていないだけで、他の縄文時代各期の資料は得られており、縄文時代の概略の編年が組み立てられる段階にきている。

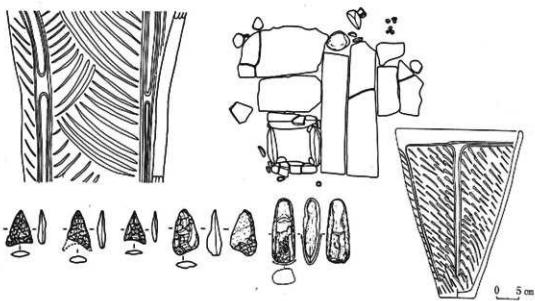
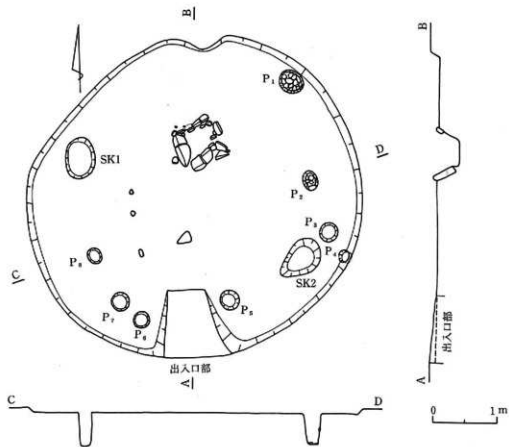
下吹上遺跡第一次発掘調査では、第1～5号住居址と第1号敷石住居址の合計6棟が検出され、このうち第5号住居址が縄文時代前期前半の関山式期の住居址、第1～4号及び第1号敷石住居址が中期後半IV期の加曾利EIV式＝曾利IV～V式期の住居址であった。

第5号住居址は、隅丸方形のプランで中央に河原石を使用した土壌状の焼石炉とみられる炉址が存在していた。神之木式と関山II式土器が出土し、石鏃・スクレイパー・凹石など各種良好な石器も出土している。第二次調査では、遺構は検出されなかったが、遺構外から関山式を主体とする前期前半の資料が出土し、また、一連の平石遺跡、上吹上遺跡でも遺構外から花積下層・上層式、神之木式、関山I・II式、清水上II式、黒浜式の土器が出土しており、大規模な集落は存在しなかったものの点的に住居址が営まれていたことがわかる。これらの中で、下吹上遺跡で検出された関山式期の住居址は、夢科山北麓地域における唯一の住居址であり重要である。

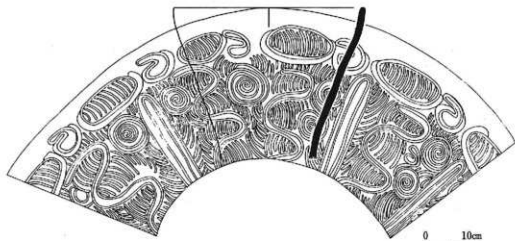
下吹上遺跡で最も繁栄した時期は、中期後半IV期で、第一次調査で5棟、第二次調査で8棟の計13棟が検出された。調査範囲が遺跡全体の20%程度であるので、全体を調査すればかなりの住居址が検出される可能性がある。平石遺跡、上吹上遺跡、貴船反遺跡でも検出されており、また夢科山北麓全体ではかなりの棟数にのぼっている。しかし、これらの住居址が一時期に大集落を営んだわけではない。IV期の土器型式においても器形及び文様の分類や細分が可能であるし、その中で幾つかの文化系統が把握できるものと考えている。従って、小集落によって何回かの段階



第51図 下吹上遺跡遺構全体図及び第5号住居址



第52図 第4号住居址及び第1号燧石住居址遺構及び遺物



第53図 下吹上第2号住居址埋壙

で本地域を立地として選択した結果であると考えられる。尚、平石遺跡はこれらの状態にあって、大規模な集落が営まれていたと思われ、住居址の検出棟数も極だて多い。

下吹上遺跡の中では、第4号住居址と第7号住居址が良好な状態で検出されており、第4号住居址は、直径550cmの不正円形を呈し、床はタタキがなされ、壁面は10～15cmほど立ち上がっていた。本址の特徴は、南側のプラン内側に出入部とみられる張出部が検出されていることである。本址は上屋を復元し、保存されている。第7号住居址は、直径450～470cmになるものと考えられ、壁面は10～15cmの立ち上がりで、床面はタタキがなされており、半分区域外で調査できなかったが当時の様子を良く伝えているものである。

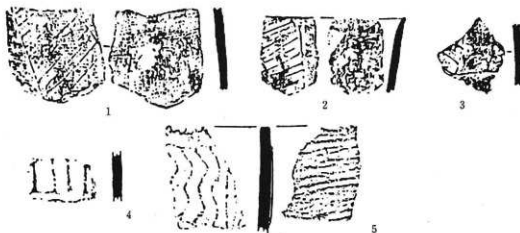
本遺跡群からは、敷石住居址が多く検出されており、下吹上遺跡では第1号住居址が該当する。平地式とも考えられ現状では壁は検出されなかったが、炉址を中心にその周りを安山岩(鉄平石)の長方形の切り石を揃えて敷いており、耕作等で石が抜き取られてしまっていたが、本来は全体に敷き詰められていたものと思われる。また、柱穴の一部と埋壙が検出されている。埋壙は、中期後半IV期の最終末に位置づくものである。同時期の敷石住居址は、平石遺跡の第1・20・21・23号住居址とみられるが、第20・21号住居址は、遺物が時期を設定することができる出土状況になかったため同時期の住居址とはいえないが、住居址の形態からみて中期後半IV期に位置づくことはほぼまちがいないと思われる。参考までに後期前半の敷石住居址は、平石遺跡第15・16号の柄鏡形を呈しており、中でも第16号住居址は、我国で今まで検出例のない張出部が石積みになっている住居址が検出されている。

遺構外から出土した遺物の中で、注目すべき資料が出土した。それは、縄文時代早期後半期の野島式土器で、他の早期関係の土器が全く出土していない中で、野島式土器だけが単独で出土した。しかも、同一個体の一括資料である。野島式土器は、微隆起線文によって文様構成される独特の土器で、神奈川県横浜市の野島貝塚出土の土器を標式に型式設定が行なわれた資料である。

長野県内においては、小県郡真田町陣の岩岩陰（第54図1～3）、塩尻市堂の前遺跡（同図4・5）そして下吹上遺跡を含め3遺跡から出土している。ただし、これらの遺跡から出土した野島式土器は、微隆起線による基本的な資料であって、近年田戸上層から続く子母口式、また後続する鶴ヶ島台式との影響の中で問題提起がなされる中で、前後型式の影響を受けない純粋な野島式土器と理解してもよい資料である。

蓼科山北麓地域における縄文時代早期の編年は、捺糸文・表裏縄文土器から各型式の押型文土器、それに併行して沈線文土器、絡糸体圧痕文系、条痕文系の各土器など、一連の概略的な体系がほぼ確立できる段階になったといえる。これらの研究内容を広く文化圏の中での分析へと位置づけ、全体的な視野に立った編年体系を確立していく必要があるものと思っている。

下吹上遺跡の第二次発掘調査は、小規模な調査ながら貴重な資料が出土したり、遺跡群や広く本地域全体の縄文時代遺跡のあり方を再認識することができた調査であった。本報告書が今後の研究の一助となれば幸いと存ずる次第である。



第54図 野島式土器（真田町陣の岩岩陰1～3 塩尻市堂の前4・5）

参考文献

- 富沢恒雄 1976『長野県地質図・長野県の地質』（信濃教育会出版部）
 森嶋 稔・福島邦男 1978『下吹上』（『長野県考古学会研究報告書』11）
 瀬川裕市郎 1983『野島式土器に関する2～3の覚え書』（『沼津市歴史民俗資料館紀要』7）
 財団法人いわき市教育文化事業団 1982『竹之内遺跡』（福島県いわき市教育委員会）
 毒島正明 1988『野島式土器研究の諸問題』（『縄文早期の諸問題』）
 長野県史刊行会 1988『長野県史』（考古資料編全一巻四 遺構・遺物）
 福島邦男 1990『上吹上遺跡緊急発掘調査報告書』（望月町教育委員会）
 福島邦男 1991『平石遺跡緊急発掘調査報告書』（望月町教育委員会）
 ※野島式土器の分布については、宮下健司氏よりご教授を受けた。



1. 下吹上遺跡全景 (西側より)



2. 調査区東側



3. 調査区西側



4. トレンチ調査の様子



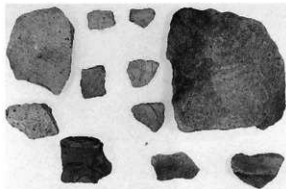
5. 第6号住居址全景（破壊されて壁が存在していない）



6. 第6号住居址土器
出土状態



7. 第6号住居址土器
出土状態



8. 第6号住居址出土土器



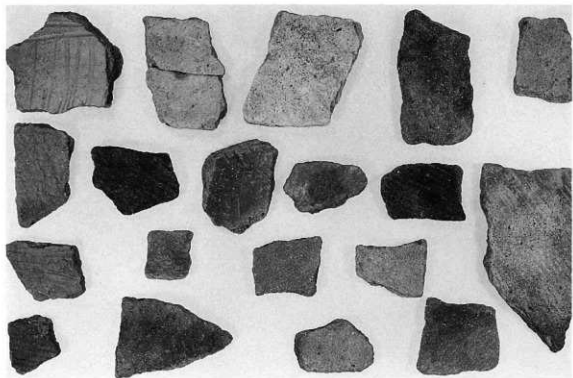
9. 第7号住居址全景



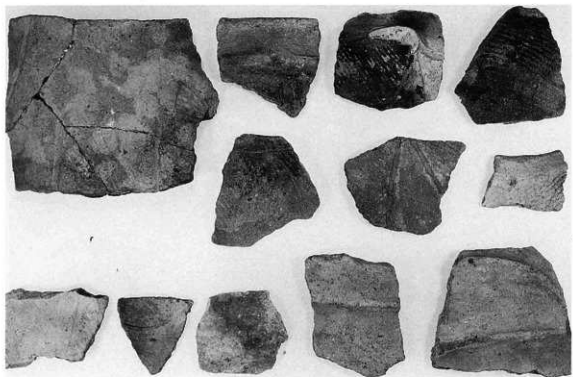
10. 第7号住居址炉址



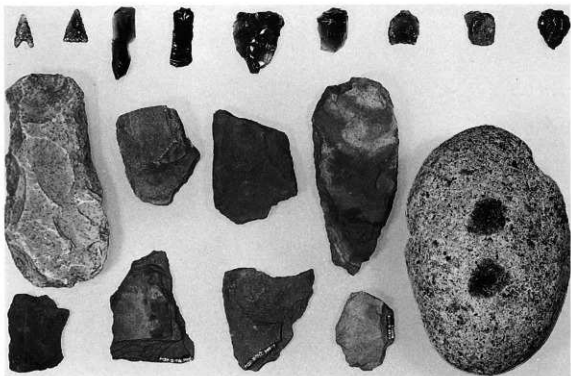
11. 第7号住居址磨石出土状态



12. 第7号住居址出土土器



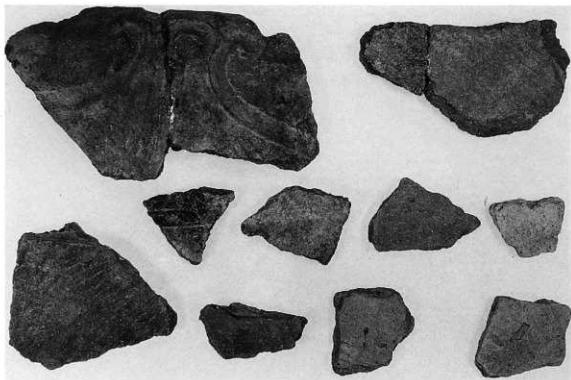
13. 第7号住居址出土土器



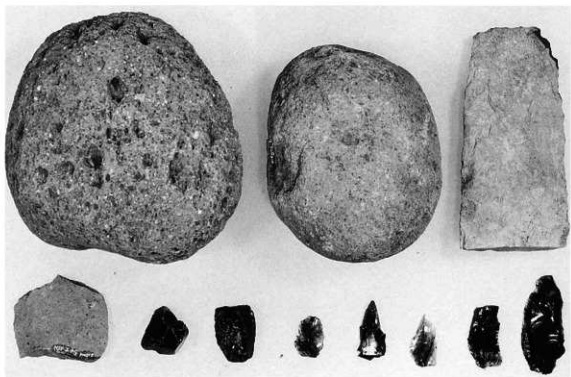
14. 第7号住居址出土石器



15. 第8号住居址全景（破壊され壁が存在していない）



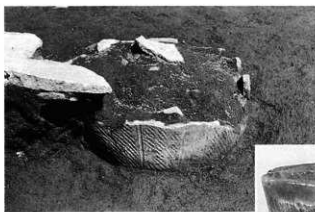
16. 第8号住居址出土石器



17. 第8号住居址出土石器



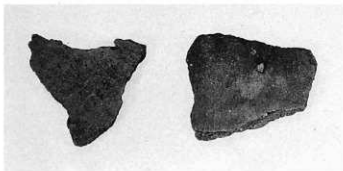
18. 第9号住居址



19. 第9号住居址埋瓮



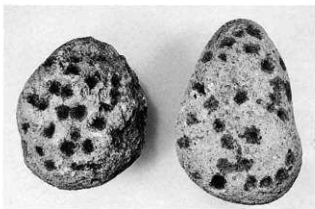
20. 第9号住居址埋瓮



21. 第9号住居址出土土器



22. 第9号住居址出土石皿



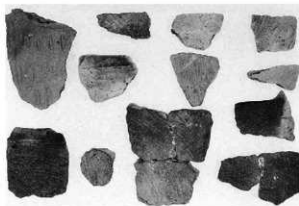
23. 第9号住居址出土多孔石



24. 第9号住居址出土砾石・磨石



25. 第10号住居址全景 (破壊され壁が存在していない)



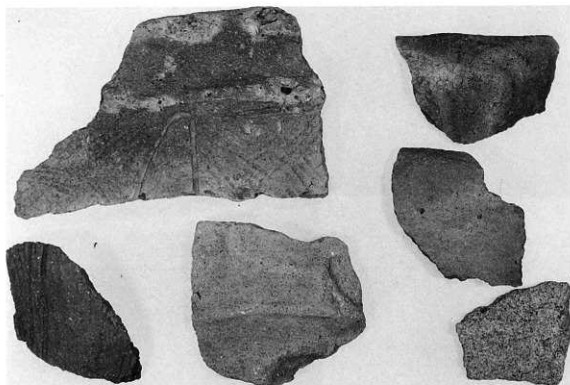
26. 第10号住居址出土土器

27. 第10号住居址出土石器 (左上2点)
第11号住居址出土石器 (右上2点)
第12号住居址出土石器 (左下4点)
第13号住居址出土石器 (右下9点)





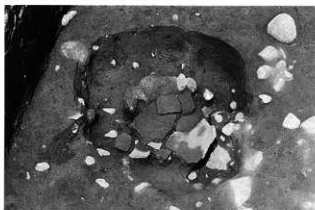
28. 第11号住居址全景（破壊され壁が存在していない）



29. 第11号住居址出土石器



30. 第12号住居址全景 (破壊され壁が存在していない)



31. 第12号住居址炉址



32. 第12号住居址埋壁



33. 第12号住居址炉址出土土器



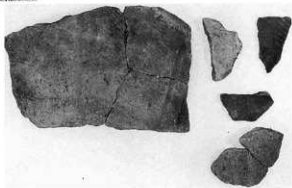
34. 第12号住居址埋甕



35. 第13号住居址全景



36. 第13号住居址土器出土状态



37. 第13号住居址出土土器



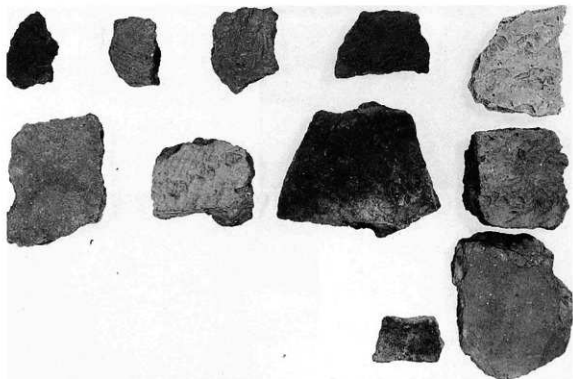
38. 第1号土坑全景



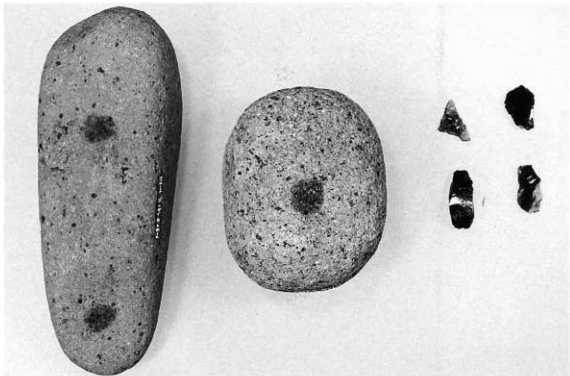
39. 第1号土坑出土土器



40. 第4・5・13~15号土壙全景



41. 第3号土壙出土土器



42. 第3号土坑石器(中央1点)、第4号土坑出土石器(左1点)、第10号土坑(右4点)



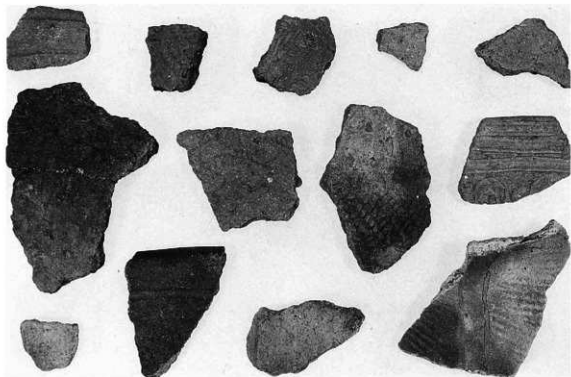
43. 第6号土坑全景



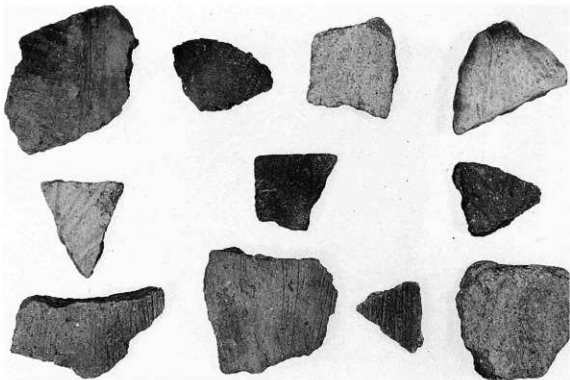
44. 第6号土坑伏甕出土状器



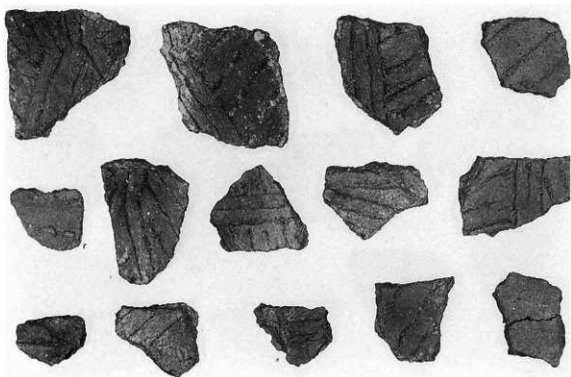
45. 第6号土壙出土伏罍



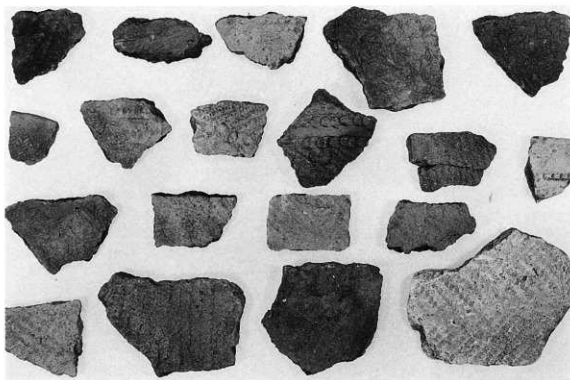
46. 第10号土壙出土土器



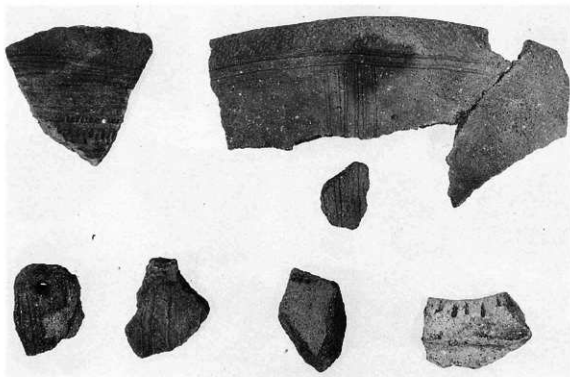
47. 第13号土塚出土土器



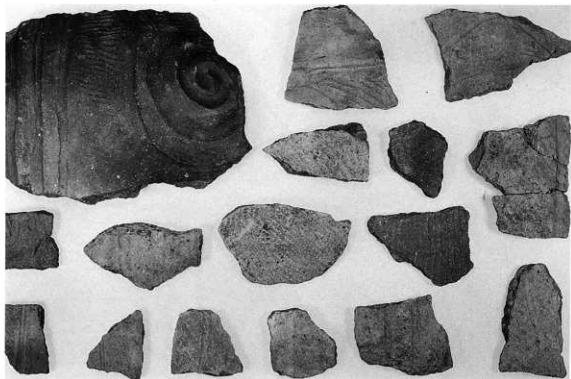
48. 遺構外出土土器(早期)



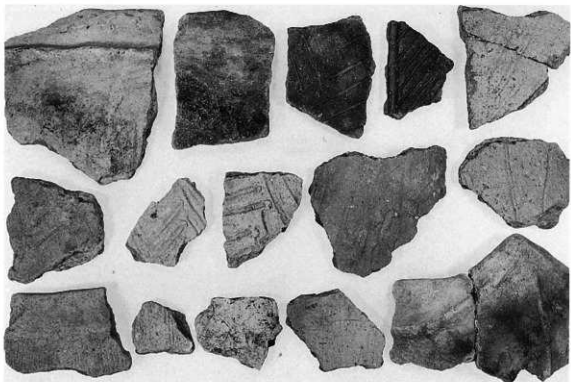
49. 遺構外出土土器 (前期)



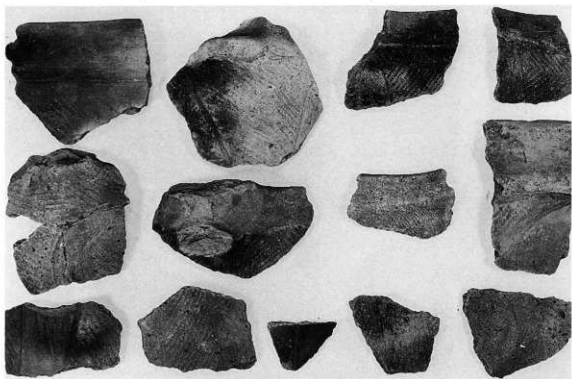
50. 遺構外出土土器 (中期)



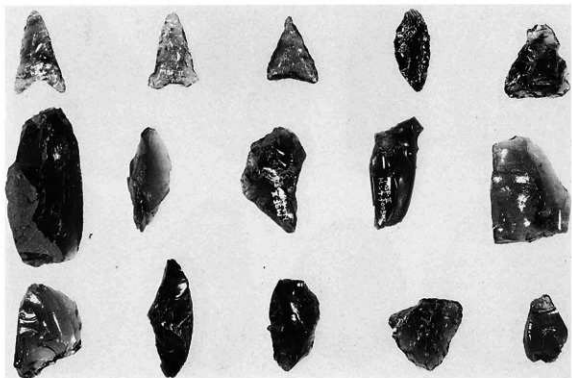
51. 遺構外出土土器 (中期)



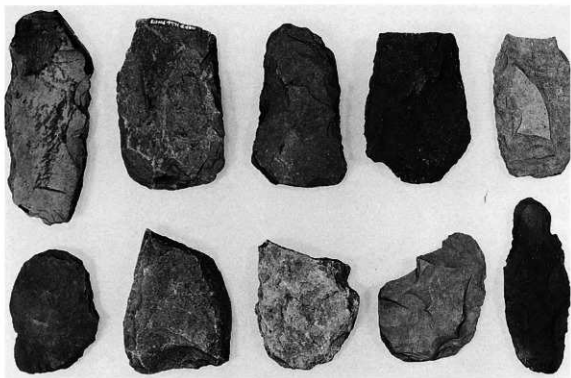
52. 遺構外出土土器 (中期)



53. 遺構外出土土器



54. 遺構外出土石器



55. 遺構外出土石器



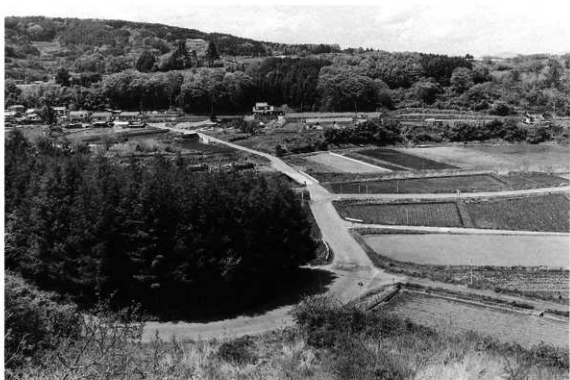
56. 遺構外出土石器



57. 遺構外出土石器



58. 遺構外出土石器



59. 下吹上遺跡遠景



60. 神事 全井神官



61. 佐藤幸男町長



62. 田中稔教育長



63. 地主 松本正己さん



64. 調査風景 (下吹上遺跡復元住居2棟が見える)

- 望月町文化財調査報告書 第1集 「下吹上遺跡」(昭和53年度)
- 第2集 「大岡遺跡第1次緊急発掘調査報告書」(昭和53年度)
- 第3集 「大岡遺跡第2次緊急発掘調査報告書」(昭和53年度)
- 第4集 「又久保遺跡緊急発掘調査報告書」(昭和55年度)
- 第5集 「望月町遺跡詳細分布調査報告書」(昭和55年度)
- 第6集 「尾崎第4号古墳、大塚第1号・2号古墳緊急発掘調査報告書」(昭和55年度)
- 第7集 「新水A・B遺跡」(昭和55年度)
- 第8集 「金塚遺跡緊急発掘調査報告書」(昭和56年度)
- 第9集 「真光寺第1号古墳緊急発掘調査報告書」(昭和57年度)
- 第10集 「春日尾崎遺跡緊急発掘調査報告書」(昭和57年度)
- 第11集 「後沖遺跡緊急発掘調査報告書」(昭和57年度)
- 第12集 「柳久保A遺跡緊急発掘調査報告書」(昭和57年度)
- 第13集 「竹之城原遺跡・浄永坊遺跡・浦谷B遺跡緊急発掘調査報告書」(昭和58年度)
- 第14集 「胡桃沢・瓜生坂A・宮久保A・布施山寺A・岩井遺跡緊急発掘調査報告書」(昭和58年度)
- 第15集 「望月城跡緊急発掘調査報告書」(昭和59年度)
- 第16集 「岩清水遺跡緊急発掘調査報告書」(昭和60年度)
- 第17集 「平石遺跡緊急発掘調査報告書」(昭和63年度)
- 第18集 「上吹上遺跡緊急発掘調査報告書」(平成元年度)
- 第19集 「平石遺跡第2次緊急発掘調査報告書」(平成2年度)
- 第20集 「山ノ神A遺跡、山ノ神第3・4号古墳緊急発掘調査報告書」(平成2年度)
- 第21集 「下吹上遺跡第2次緊急発掘調査報告書」(平成3年度)

望月町文化財調査報告書 第21集

下 吹 上 遺 跡

—— 第二次緊急発掘調査報告書 ——

発行日 平成4年3月19日
 編集者 望月町教育委員会
 発行者 望 月 町
 望月町教育委員会
 印刷 ほおずき書籍株式会社
